F10-G343ウ
1200500761405
10
343

32.2.23

F10
G343

決定版 現代日本小説全集

第十五卷

佐々木邦集

アトリエ社刊

128

目次

無軌道青春……一
先輩・後輩・同輩——光岡君の骨相學——天下の大勢——大賢の出來損ひ——說法狸——侮り難い敵手——正面衝突——一通十圓の手紙——晴曇交々來る——大悟一番——大きな油斷——斷の一字——人格者の戀愛努力——落ちつくところへ

求婚競爭……五二九
久潤の級友——家業問答——雙鴨の圖——畫室の監督——金物問屋の長男——身邊多端——他の偶然

出世運……六二七
はしがき——あなたは運を信じますか？——學校時代——後の烏・先の烏——附記

無軌道青春

先輩・後輩・同輩

『光岡さんですね』

僕は稍々驚いて、直ぐに言葉をかけた。隣りへ腰を下した男があつたから、振り返つたら、何うも見たことのある横顔だと思つた途端、お互の視線が行き當つたのである。

『やあ』

『お久しぶりですな』

『君は誰ですか？……』

『僕は……』

と僕はこゝで考へた。此方が知つてゐる積りなのに、眞向から名前を訊かれるのは拍子抜けのするものだ。忘れてゐるのなら、そのまゝにする方が宜かつたと思つたのである。

『自分の名前を考へてゐるんですか？』

『僕は稲垣です』

『はゝあ』

『もう御記憶がないかも知れません』

『稲垣何君ですか？』
と光岡君は僕の顏を凝つと見据ゑた。矢つ張りいけない。僕は餘計なことをしてしまつたと思つたが、今更仕方がなかつた。
『小三郎です』
『稲垣小三郎君と？』
『鄕里の中學校でズツと後輩ですから、御記憶はない筈です』
『君』
『何ですか？』
『こゝは大學の教室ですよ。頭の好い積りの連中が揃つてゐるんですから、然う繰り返して他の記憶力を疑ふものぢやありません』
『失敬しました』
『氣をつけることですよ』
『はあ』
僕は飛んだ奴にかゝり合つたと後悔した。光岡君が大威張りで極めつけたものだから、前の机の學生が振り向いた。興味を持つて聽いてゐるのらしい。第一時間の講義が終つて、次の先生が十分後れる癖だから、未だ一寸間がある。

『冗談だよ、君。ハツハ、、、』
『もう宜いです』
『ハツハ、、』
『……』
『矢つ張り兄貴に似てゐて直ぐに憤る。冗談が分りませんな。稲垣君、君は格之助君の弟さんでせう』
『然うですよ』
『小三君だ。小三々々つて兄さんが言つてゐたぢやありませんか？』
『矢つ張り覺えていらつしやるんですね』
『忘れやしませんよ。鄕里には稲垣が多いですから、何の稲垣君だらうと思つて考へてゐたんです。君は確か一年だつた。二年だつたかな？』
『一年と二年でした。あなたが五年の時でした』
『よせやい』
『はあ？』
『僕が五年を二度やつたと言はないばかりぢやないか？　壁に耳あり、南瓜に目ありだ。お手軟かに頼むよ』

と光岡君は僕を窘めるよりも前の机の學生二人に當てつけたのらしかつた。

『……』

『君は高等學校は何處から來たんだい？』

『矢張り鄕里です。あなたは一高でしたな』

『うむ。以來鄕里とは緣が切れてしまつた。尤も叔父に監督して貰ふ積りで行つてゐたんだから』

『叔父さんは惜しいことをしましたな』

『うむ。代議士になつて調子が好かつたものだから、酒を食ひ過ぎたんだよ』

『僕は兄貴について、あなたのところへ一二度行つたことがあります』

『それで僕も覺えてゐるんだよ。格之助君は京都だね？』

『はあ。しかしもう……』

と言ひかけて、僕は氣がついた。相手が大變後れてゐるのだから、それを又思ひ出させたくなかつた。

『卒業かい？』

『はあ』

『目下就職難つてところだらう？』

『いや、去年出て、大阪で會社へ入つてゐます』

『早いな。尤も順當に行けば、それが當り前だ。しかし驚いたよ』

『何ですか？』

『僕は少し呑氣過ぎる。格之助君の弟の小三君と同級になつてしまつたんだからね。考へて見ると後れたものだ』

と光岡君は歎息した。

『しかし……』

『何だい？』

『あなたの後れ方が違ふんでせう？』

『うむ。これでも落第はしたことがない。試驗を受けないばかりだ』

『先學期も來ていらしつたんですか？』

『いや、ズツと休んで、今日初めて出て來たんだよ』

『はゝあ』

『妙な廻り合せだね。一年後れてさ、春から休み續けてさ、初めて出て來たら、君に會つたんだ。好い見せしめだよ』

『そんなこともないでせう』

『これからは少し勉强する。宜しく賴むぜ』

『僕こそ』
『昔馴染つてものは好いものだね。直ぐに斯ういふ具合に話せるんだから』
『はあ』
『僕は年が寄つたらう？』
『然うでもないです』
『君は見違へるくらゐ大きくなつたよ』
『ハツハ、、』
その日はそれ丈けだつたが、光岡君は以來大抵毎日出席して、僕と顏を合せた。
『何うだい！　小三君』
と先方は遠慮がないが、此方は兄貴の同級生といふ頭があるから、
『やあ。光岡さん』
と自然改まる。光岡君は間もなく、それはいけないと言ひ出した。
『しかし先輩ですから』
『以前は先輩でも今は同輩で、將來は後輩になる運命を持つてゐるかも知れない。光岡・貴樣とやつてくれ給へ』
『然うは行きません』

『それぢや光岡君と呼んでくれ。光岡さんと言はれると、氣が引けて困る』
『光岡君』
『何だい？』
『矢つ張り具合が惡いです』
『構はないよ。僕も稻垣君とやる。稻垣君』
『何ですか？』
『講義をすつぽかして、何處かへ遊びに行かう』
『厭ですよ』
『冗談だよ。ハツハ、、』
と光岡君は周圍に構はず笑つた。
僕は光岡君と同級になつたことを手紙の序に大阪の兄貴へ報告してやつた。兄貴は筆無精にもかゝはらず、直ぐに返事を寄越した。餘程慌てたのらしい。光岡と一緒とは驚いたと告白した後、
『光岡と交際してはいけない。兄貴が然う言つたと明言して置く方が宜い。友人のことを惡く言ふのではないが、彼氏はお前に好い感化を與へる代物でない。それにあゝいふ金持の息子と交際するのは精神的にも物質的にも負擔になる。この手紙一讀次第、敬遠主義を取つてくれ。今まで大學にブラブラしてゐて、而も未だ第一回生といふのなら、後進の模範にならないことは確實だ。それ丈けでも分

つてゐるぢやないか！　僕は中學時代に同級だつたから、よく知つてゐるが、彼氏は俗に言ふお調子者だ。煽てられると、途轍もないことをやり出す。僕は彼氏の爲めに多大の迷惑を蒙つてゐる。僕ばかりぢやない。同級生は大抵彼氏の卷添へを食つてゐる。三年の時、十人ばかり揃つて一ケ月停學を命じられたのも、全く彼氏のお蔭だ。僕達は西方寺の墓地で試膽會をやつた。彼處は淋しい。一人々々一番奥の方のお墓へ行つて、晝間用意して置いた證の品物を取つて來る。未だ子供だから皆怖々だつたが、兎に角、順番を終つて、息をついた。それで歸つて來れば宜かつたのに、誰だつたか「この中で一番度胸の好いのは光岡だらう」と言つて煽てた。すると光岡は「待ち給へ。僕は君達に出來ないことをして見せる」と言つて、又墓地へ入つて行つた。僕達は可なり長い間待つてゐた。光岡は新墓の墓標を引つこぬいて、ヨチヨチ擔いで來た。驚いたよ。同時に坊さん達が追つかけて來た。「それッ」と皆逃げ出したが、僕は尻餅をついて、取つ捉まつてしまつた。小坊主に撲られて、泣きながら、お寺へ引かれて行つた。警察へ突き出すと言ふんだ。墓地を荒すものは死刑だと言ふんだ。僕は辯解したけれど、先方は憤つてゐるから耳に入れない。しかし警察丈けは堪忍して貰つて、學校へ電話をかけた。宿直の先生が駈けつけて、あやまつてくれた。それで表向きは濟んだが、僕達十名は處罰として一ケ月間の停學を食つた。僕はこれに懲りれば宜かつたんだが、光岡は必ずしも不良でないから相變らず親しくしてゐた。彼氏の弱點は寧ろ善良過ぎることにある。人間が生一本だから、直ぐに煽てに乘る。奇妙な名譽心を持つてゐる。人と違つたことをして褒められたいんだ。何處か少し足

りないのかも知れない。奴は馬鹿だといふ說もある。しかし考へて見ると、その卷添へを食ふ此方も餘り悧巧ぢやない。五年の時、又引つかゝつてしまつた。大砲事件だ。これはお前も知つてゐる。僕達五名は火傷をした上に、一學期間の停學を命じられた。丁度三學期だつたから、學年試驗が受けられない。僕はその春高等學校へ入つたから宜かつたが、他の連中は光岡の卷添へで一年後れた勘定だ。あれ以來皆はもう警戒して、敬遠主義を取り始めたらしい。僕もその頃二三度會つたきり、以來音信不通だ。彼氏は惡い人間ではないが、危い人間だと思つてゐる。意志が弱いんだ。中學時代には僕達が傍で煽てゝやつたから、成績も相應だつたけれど、元來自力で奮發の出來ない男だから、未だに大學にマゴマゴしてゐるんだらう。あゝいふ性格で金の自由の利く境遇だから、長いこと停滯してゐる間に不良化してゐるかも知れないよ。然うした彼氏とお前が毎日机を並べてゐると聞いて僕は寒心に堪へない。兄貴が宜しく言はなかつたと言つてくれ。これ丈けで彼氏には充分意味が通じる。諒としてくれる理由があるんだ』

と興奮して、長文の筆を結んであつた。それで僕も考へた。兄貴の註文通りを傳へれば、光岡君は氣を惡くするに定つてゐる。先方が好意を持つてゐてくれるのに、そんな挑戰的の態度に出る必要はない。それよりも交渉を教室内に限る方が宜い。幸ひ未だそれ以上に進んでゐなかつた。同じ机に並んでゐても、日に一寸宛敬遠すれば、一月に三尺の距てが生じる。その中には先方が休んで緣が切れるかも知れない。勉强家でないことは分つてゐる。僕は相手の感情を害さないやうにして、兄貴の忠

告に從ふ積りだつた。

『稻垣君、僕は君にお禮を言はなければならない。君のお蔭でこの頃は好い習慣がついたよ』

と光岡君は此方の肚の中を知らずに、打ち解けて話しかける。

『何ですか？』

『君が待つてゐると思ふと、學校へ出て來るのが樂みになつた』

『ナカ〳〵御勉強ですな』

『これでもやる氣になればやるんだよ。決心がついたよ、イヨイヨ』

『何の決心ですか？』

『卒業する決心さ』

『はゝあ』

『驚いたらう？』

『はあ。尠からず』

『ハツハヽヽ』

『矢つ張り境遇が違ふんですな』

『法律でも經濟でも、人に習はせて置く方が早い。自分でやつたつて、いざといふ場合の間に合はない。何うせその道の大家を頼むんだからね』

『資本家の立場からなら然うでせう』

『いや、一個人としての見地から考へても然うだよ。學校の講義なんて高の知れたものさ。その邊の古本屋へ行けば、幾らでも賣つてゐる。悉皆鵜呑みにしたところで何の足しにもならない』

『それぢや學校へなんか來ない方が宜いぢやありませんか？』

と僕は少し癪に障つた。少くともこれは四年も後れてゐる人間から聞かされる議論でない。

『君、決心がついたんだよ、來る方の』

『……』

『君は矢つ張り兄貴に似てゐる』

『何ですか？』

『直ぐに憤る』

『憤つたんぢやありません』

『まあ〳〵、聞いてくれ給へ。僕は學校つてものに重きを置いてゐない。しかし學問を馬鹿にして卒業しなくても、世間では然う思つてくれない。奴は馬鹿で學問が出來ないから卒業しないんだと思ふ。そこで僕は考へたんだよ』

『はゝあ』

『例へば緣談だ。貰ひたいのが幾人もあるから當つて見たら、何れもこれも大學を出てゐなければ厭

だと言ふんだ』
『ハツハ、、』
『今の分際ぢやテンデ問題にならないから、イヨ〳〵卒業する決心がついた。といふと動機が聊か薄弱だけど、入學した以上は卒業するのが當り前だから、今更變説したことにはなるまい』
『入學して置いて卒業しないといふのが既に動機不純で變説でせう？』
『ひどく來たね』
『入學した以上は停滯しないで卒業するのが當り前ですよ。理窟をつけるのは間違つてゐます。何か爲めにするところがあるからでせう？』
『參つたな、これは。まるで譴責だ』
『遠慮をしない約束ですから』
『それぢや決心といふ言葉を取消して、順當の精神に戻つたと改める』
『年來の迷ひが晴れたんです。自分を特別誂へのやうに思つてゐるのが一番いけません』
『君は兄貴よりも嚴しいよ』
『ハツハ、、』
『しかし氣に入つた。何でも思ひ通りを言つてくれる』
『先輩に對して失敬ですけれど、僕は調子を合せるのが嫌ひです』

『もう先輩ぢやない。同輩だ。宜しく頼む』
『簡單明瞭ですよ。出席して講義を聽いて試驗を受ければ宜いんぢやありませんか？』
『それにしてもさ。道連れがあると、勵みが出る』
と光岡君は何處までも僕を頼みにしてゐる。敬遠が利かない。
『あなたは友達がないんですか？』
と僕は序をもつて訊いて見た。
『あるさ。あるといへば、僕ぐらゐ友達のある人間はないよ。何年も停滯してゐるから、同級生の多いこと類がない』
『成程』
『しかしないといへば、僕ぐらゐ友達のない人間はないよ。同級生が皆失敬して先へ行つてしまふから、此方が一人取り殘される勘定だらう』
『成程』
『あるやうでなし、ないやうでありさ』
『鄕里の連中は何うですか？　中學時代の』
『寄りつかないね。尤も僕の方でも寄せつけない』
『何故ですか？』

「懲りてしまつた。僕ぐらゐ友達の爲めに災難を食つてゐる人間はない。中學時代を思ひ出すと、停學處分の連續だ。それだから、不良のやうな印象を殘して來たが、あれは皆友達が惡かつたからだ。

『兄貴なんかも御迷惑をかけた方ぢやなかつたですか？』

『君の兄さんにはひどい目に會つてゐる』

『はゝあ』

『君を前に置いて斯う言つちや濟まないけど』

『構ひませんよ』

『五年の時には停學どころぢやない。命が危かつた』

『大砲事件でせう。僕は知つてゐます』

『實に無法なことを思ひついたものさ。公園に置いてある戰利品の大砲に火藥を詰めて打つ放さうつてんだ』

『新聞に出ましたね』

『うむ。火藥陰謀さ。あれはガイ・フオークスの話から考へついたんだから、西洋歴史の先生にも責任がある』

『しかし先生が奬勵したんぢやないでせう？』

『ガイ・フオークスの火藥陰謀を臨時試驗に出したんだよ。皆それが出來なかつたもんだから、一

つやつてやれつてことになつた』

『亂暴ですな』

『群集心理さ。しかしあれが手製の火藥だつたから、片山君の頭が禿たぐらゐで濟んだんだよ。眞物が手に入つたら、大砲が爆破して皆死んでゐる。後から叱られて、成程と思ひ當つたが、實に向ふ見ずをやつたものさ』

と光岡君は尙ほその折のことを話し續けた。

『その一番ひどく火傷をした片山つて人は米屋をやつてゐますよ』

『うむ。家が米屋だつた。頭の毛が生えたかい？』

『いや、禿てゐます。屹度あなたを恨んでゐるでせう』

『僕を恨んだつて仕方がない』

『誰が張本人ですか？』

『群集心理さ。誰つてこともない』

『兄貴はあの爲め一年後れるところでした』

『僕達は本當に後れたよ。悧巧な奴は立ち廻りが上手だから、損をしないけれど、僕は受難性に富んでゐるから、取つ捉まつたが最後、屹度重いんだ』

『評判でしたよ、光岡さんといへば』

『いつも群集心理の責任を背負はされるものだからね。それで懲りたんだよ。友達は選んで附き合はなければいけない。君も氣をつけ給へ』

『はあ』

『君はナカ〳〵交際家のやうだね』

『そんなことはないです』

『しかしよく皆と話をしてゐる』

『同じ高等學校から來た連中丈けです』

『僕を紹介してくれないか？　君の友達なら大丈夫だらう』

『その中に追々』

『何人ゐるんだい？』

『四五人です』

『鄕里の中學を出たものもゐるのかい？』

『一人ゐます。僕と同級生です』

『それなら僕を知つてゐる筈だ』

『知つてゐるから、恐れを爲してゐるんです』

『然ういつまでも先輩扱ひをしなくても宜いんだ。今度その男をつれて、僕のところへ遊びに來ない

か？　一晩鄕里の話をしよう』

『御免蒙ります』

『何故？』

『招魂社あたりの大砲へ火藥をつめる相談が持ち上ると大變です』

『馬鹿を言つてゐる』

『ハツハヽヽ』

と僕は思ひさま笑つてやつた。

光岡君と僕の交際はその學期の大部分教室内に限られた。時々誘はれたけれど、僕は決して應じなかつた。しかしお互としては可なり親しくなつた。敬遠しようと思つても、接近して來るから仕方がない。それに光岡君はもう休まなかつた。

『何うだい？』

『相變らずだよ』

『いや、君の方ぢやない。僕のことだよ。僕は君との約束を守つてゐる。感心だらう？』

『何の約束だい？』

『几帳面に出席してゐる』

『それは當り前だよ。皆毎日來てゐるんだから』

『何うも君は同情に乏しい』
『同情しやうもないぢやないか？　君が學校へ來るのは君の爲めだ』
『然う理責めに言つてしまへば、それまでだけど、僕が毎日規則正しく學校へ出るつてのは何年にもないことだ。家中皆感心してゐる』
『それは君が年來怠けものだつたからさ』
『その年來の怠けものが昨今のやうに一心不亂の勉强家になつたんだから』
『一心不亂でもないぜ』
『兎に角、缺席しなくなつたことは事實だらう？』
『それが何うしたと言ふんだい？』
『それは偏に君の感化力だよ。君は豪い』
『煽てゝも駄目だ』
『本當だよ、僕は感謝してゐる』
『その代償として感心しろと言ふのかい？』
『先づその邊さ』
『よし。褒めてやる。天晴れ〳〵』
と僕はもう先輩も後輩もなかつた。

『稻垣君』
『何だい？』
『君、今日僕のところへ遊びに來てくれないか？　いつもは僕が誘ふけれど、今日は違ふ。母と妹が君に會ひたいと言ふんだ』
と或日光岡君が申出た。
『母と妹？　何ういふ經緯だね？』
『この間から話してゐる通り、僕が更生一新したものだから、家のものは皆驚いてゐる。家ばかりぢやない、親類中の評判だ』
『ふうむ。學校へ出るやうになつたのが更生一新かい』
『然うさ。父が僕の部屋へ入つて來て「今まで小言を言つたのは決して惡しかれと思つたんぢやない」つて妥協を申込んだくらゐだ』
『甘いんだね、君のところは。君のやうな息子が出來る道理だよ』
『君は事情を知らないから、何でも簡單に片付けてしまふんだよ』
『何んな事情があるんだい？』
『それもゆつくり話すから、來てくれ給へ』
『折角だけれど、お斷りする』

『何故？』
『意味はない』
『あるだらう？　僕が幾度誘つても、厭だと言ふからには、何か含んでゐるんだ』
『氣が向かない丈けさ』
『いつになれば氣が向くんだい？』
『さあ、永久に向かないかも知れない。毎日會ふんだから、こゝで話せば宜いぢやないか？』
と僕は方針が定めてあつた。
『家のものが君に會ひたがるのは好奇心だよ。無理もない。君を何んな豪い人間だらうと思つてゐる』
『分らないね』
『僕に感化を與へたからさ。更生一新させたからさ』
『君、學校を休まないなんてことは小學生でもやつてゐるぜ。更生一新でも何でもない』、
『君は僕の事情を知らないから、そんな同情のないことを言ふんだ。兎に角、僕は君の爲めに發憤して、以來尠くとも人並に勉强してゐる』
『それは君の勝手だよ。僕は忠告も何もした覺えがない』
『當り前さ。開き直つて忠告して見給へ。直ぐに喧嘩になる。先輩だつて何だつて容赦はない。正面

から來れば、蹴飛ばしてしまふ』
と光岡君は非常な勢ひで言つた。一寸本領を發揮したのらしい。
『ふうむ』
『僕は元來然ういふ性分だ』
『それぢや忠告すれば仲違ひになるんだね？』
と僕は念を押して置く必要があつた。
『いや、君丈けは別だよ』
『何うして？』
『信用してしまつたんだ。君は豪いところがある』
『何處が豪い？』
『さあ。何處つてことは言へないが、漫然と豪い。要するに人格者だ』
『無暗に評判が好いんだね』
『僕はいつかも話した通り、同級生の多かつたこと無類だから、友達も多かつた次第だが、君のやうな人格者は初めてだ』
『よしてくれよ』
『本當だよ。お世辭でも何でもない。家のものも皆認めてゐる。今までに僕に好い感化を與へた友達

つてものは一人もなかつたんだ。友達といへば危いものに定つてゐた。悪いことを發起して、此方を群集心理の犠牲にする。しかし君は違ふ。僕を發憤させてくれた。それも忠告ぢやない。暗々の裡だ。それだから豪いんだ』

『して見ると、人格者かな、これでも』

『しかし餘所へは通用しないよ』

『ふうむ？』

『僕に丈けだから、餘り己惚れない方が宜い』

『上げたり下げたりだね』

『蛇のやうなものだよ。あれは蛙に對して人格者だ』

『おや〳〵』

『僕は初めの中休みたくなつたけれど、稲垣が睨んでゐるからと思ひ直して出て來るやうにしてゐたんだ』

『睨んでなんかゐなかつたよ』

『そこが蛇さ。蛙の方では矢つ張り睨まれてゐると思ふから感化を受ける』

『それぢやその蛇を見たいと言ふんだね？　君の母や妹が』

『然うさ。それだから好奇心だと言ふのさ』

欠

『え？』
『柄にないよ』
『君がかい？』
『僕も君もさ。それよりも出掛けよう』
『何處へ？』
『銀ブラは何うだい？　久しぶりで』
『さあ』
『今日は懐ろが溫かいから、何處へでも案内する』
『カフェーかい？』
『うむ。君の柄に合ふところだ』
『惡友だな』
『何とか言つてゐやがる』
とこれが堀越君の見積りらしかつた。
それから間もないことだつた。日曜の朝、僕は堀越君を訪れる積りで玄關へ出た。靴が汚れてゐたから、女中が拭いてくれる間、待つてゐた。そこへ立派な老紳士が自動車から下りて入つて來た。
『お家に稲垣小三郎つて方がいらつしやいますか？』

欠人

と女中は立ち上つて、僕の顏を見た。
『僕が稻垣です』
『これは〳〵』
『あなたは何方でいらつしやいますか？』
『申し後れました。光岡です。卓爾の父です』
『はゝあ』
『お禮を申上げたいと思つて伺ひました』
『恐れ入りましたな。これは』
と僕は勘からず慌てた。光岡君のお父さんは大きな會社の社長だ。本郷の安下宿へ姿を現す人でない。
『お差支なければ』
『はあ。何うぞ』
『それでは』
と光岡氏は上り込んだ。
僕は二階の部屋へ案内して、自分の座蒲團を推し薦めた。

欠

『僕は決して人の模範になるやうな人間ぢやありません』
『人格者つてものは皆然うです。自分から人の模範をもつて任じるやうでは商賣人です。無爲にして化す。あなたは正にそれです』
『大變なことになりましたな』
『四年も後れるくらゐですから、卓爾は先生方からも私達兩親からも隨分言ひ聞かされてゐます。義兄が、これは長女の婿ですが、見るに見兼ねて、この正月お説法をしました。すると卓爾は突如組みつきましたよ』
『はゝあ』
『何だ？　貴樣は。女房のお蔭で出世をしやがつて、大きなことを言ふな。と斯うです』
『荒いですな、ナカ〳〵』
『以來仲違ひですよ』
『あなたがお小言を仰有つてもお愼りになりますか？』
『いや、親の權威は認めてゐます。しかし聞き流しにして受けつけないから、仕方がありません。尤ももう二十五になるんですから、理窟は悉皆分つてゐるんです。お説法には食傷してゐますから、暗の裡に感化を與へて下さる人が何より有難いんです。今後とも何分宜しく御指導をお願ひ申上げます』

欠

と光岡氏は手をつかへて頼み入つた。僕は親父にこの有様を見せてやりたいと思つた。光岡さんといへば郷黨切つての成功者だ。この人が先頃東京へ籍を移すと言つた時、郷里の有志は歎願書を出して思ひ止まつて貰つた。親父もその有志の一人だつた。尚ほ光岡辯護士が代議士に當選したのも、光岡氏といふ豪い兄さんを持つてゐたからだ。郷里では實際光岡さま〳〵だ。その光岡氏が自身罷出て懇願するのだから、僕も感激せざるを得ない。

『指導なんてことは以ての外ですけれど、幸ひ同郷同窓つて關係で特別御懇意に願つてゐますから、お互に扶け合つて行きたいと思ひます』

『願つたり叶つたりです。何分宜しく』

『及ばずながら』

『實はこの正月義兄との一件以來、私は諦めてゐたんです。しかしあれが物になるやうなら、大きな重荷が下ります。御承知の通り、あれは唯今は惣領です。兄がありましたが、小さい頃亡くなりました。その後でしたから、大切に育て過ぎた嫌ひもありますが、あゝいふ我儘ものになつたのには別に又事情があるんです』

『卓爾さんも勉强の出來ない事情があると仰有つてゐますが、何ういふお話ですか？　承はつて置きませう。お附き合ひする上の參考になりますから』

と僕はもう指導者の態度だつた。

『あれは十の時、庭の井戸に落ちて、死ぬところでした。頭を打つたのです。一週間ばかり昏睡狀態を續けて、醫者はもういけないと申しました。假りに一命を取り止めても、狂人になるか馬鹿になるか、二つ一つだといふ診斷でしたから、私も母親も落膽しました。しかし好い鹽梅に醫者の意見を裏切つて、一命を取り止めた上に、一向異狀を呈しません。元來頭の好い子でしたが、益々冴えて來ました。醫者なんてものは當てにならないと思ひましたよ。これは頭を打つたですけれど、打ちどころが好かつたから、一種の刺戟になつたのかも知れませんと苦しい說明をしてゐました。兎に角、私達は安心しました。全く故障なしに濟んだのだと思つてゐました。すると或日のこと、卓爾は學校から小使さんに送られて歸つて來ました。先生に食ひついたといふんです』

『はゝあ』

『矢つ張り醫者の診斷が當つてゐました。急に亂暴になつて、まるで狂人です。逆らふと咬みつきますから、小言を言ふことが出來ません。氣なりにして置けば無事ですから、學校へも事情を話して、特別扱ひにして貰ひました』

『成程』

『同級生には決して惡いことをしません。目上のものに突つかゝつて行くんです。先生を三四回咬んだ丈けで、好い鹽梅に落ちつきました。何うせ子供ですから、いたづらはします。先づ順當に戻つたと思つて安心してゐましたら、中學校へ入る時に小學校の校長さんから注意がありました。「このお子

さんは頭が敏感になつてゐますから、中學校は刺戟の強いところが宜しい、つまりては東京は不向きです。地方に限ります』と言ふのです。校長先生、體好く身を躱したんです。先生に食ひつくやうなものを近くの中學校へ推薦すると、學校の信用が落ちて、後が利かなくなりますからね』

『成程。そんな關係で郷里の中學校へお出になつたんですな』

『然うです。叔父がゐましたから頼みました』

『郷里でも大分おやりのやうでした』

『叔父も持て餘したやうです。考へて見ると、私は卓爾を郷里へやつた爲め豪い目に會つてゐます。叔父は六年間實に苦勞をしたと言ふのです。下げたくない頭を中學校へ持つて行つて幾度下げたか知れないから、その慰藉料として遊學費用を出して貰ひたいと吹つかけて來ました』

『ハツハヽヽ』

『辯護士ですな、流石に』

『お出しになりましたか？』

『はあ、食ひつかれました。何うせ金のかゝる息子です』

『一高時代は何んな具合でしたか？』

『あれも萬更馬鹿ぢやありません。郷里では友達が悪かつたんです』

『成程』

『私の名前が多少知れてゐますから、光岡さん光岡さんつて皆に煽てられたんです。隨分暴れたやうですけれど、あればかりの責任ぢやありません。友達つてものに懲りてゐますから、もう交際をしなかつたのです。お蔭で一高時代には尠しも問題を起しませんでした。人間も大分落ちついて來ました。しかし同時に奮發心がなくなつてしまつて、一高で二年、大學で一年後れました』

と光岡氏は光岡君の經歷を一通り話し終つた。

『勉强がお嫌ひな丈けで、別に道樂はありませんか？』

『ありますよ。油繪を描きます。これはもう長いことやつてゐますから、可なり上達してゐるやうです』

『はゝあ』

『西洋音樂にも趣味があります。尤もこれは聽く丈けで、自分では餘りやりません。ギーターを少し彈くぐらゐのものです。その他活動寫眞、麻雀、玉突、爲めにならないことなら、何でも一通り好きです』

『思想傾向は何うですか？』

『この點は安心です。決して御迷惑をかけるやうなことはありません』

『僕は何うすれば一番光岡君の爲めになるんでせうか？』

『差當りは現在のまゝで御交際を續けて下されば結構です』

『それはお安い御用です』

『私達兩親としては尙ほ將來のお願ひがあるんですけれど』
『何ですか？』
『あれが如何にもあなたに信頼を置いてゐますから、御一緒に願へたら、何んなに都合が好からうかと思ふんです』
『しかしお家から通へるのに下宿つてことは無駄ですよ』
『いや、宅の方へあなたに來て戴きます』
『さあ。それは何方にしても考へものでせう。僕は何かの間違ひで人格者視されてゐるんです。始終一緒にゐて感化を與へる自信はありません』
と僕は謙遜でなく、それが事實らしかつた。
『兎に角、私が今日上つてお頼みしたことは內證に願ひます。策動でもしたやうに思ひ込んで、又氣が變るといけません』
『承知しました』
『母親に丈けは話しましたが、他は誰にも秘密です。足がつくといけないと思つて、この通り散步姿です。途中で圓タクを拾つて來ました』
『悪いことでもするやうですな』
『變に氣を廻すと困りますから、何うぞそのお積りで』

『はあ』
『卓爾は家へお遊びにお出になるやうにお誘ひしませんでしたか？』
『度々御招待を受けました』
『今度の機會に是非お出下さい』
『はあ。お言葉に甘えます』
『それでは又お目にかゝらせて戴きます。その折は何うぞ初對面のお積りで』
と光岡氏は頻りに念を入れた。
僕は滿足だつた。鄕黨の大先輩からこれ丈け認められゝば、當然感銘する。兄貴の忠告は何處かへ飛んでしまつた。兄貴だつて光岡氏から直接頼まれたと聞けば無論苦情を言ふまい。僕は及ばずながら、光岡君を善導する決心の臍を固めた。
『君、何うだい？』
『行かう』
『え？』
『行くよ、今日』
『感いたな。これからソロ〳〵誘はうと思つてゐたところだ』
『僕は君の心持が分るんだ』

『感心々々。斯う來なくちや本當でない』
と光岡君は別に怪みもしなかつた。
僕はその日初めて光岡君の家へ伴はれて行つた。想像してゐた以上に立派な屋敷だつた。光岡君は母屋を通り抜けて、アトリエのやうな別館へ案内した。
『こゝが君の書齋だね』
『うむ兼畫室だ』
『油繪を描くのかい？　君は』
『描くとも。これで學校が一年や二年後れてゐる』
『こゝにあるのはは皆君の作品かい？』
『然うさ』
『これは誰だい？』
『妹だよ。始終モデルになつてくれる』
『此方のも然うだね』
『その方が好いんだよ。巧いだらう？』
『これは驚いた』
『多少分るのかい？』

『分るさ。巧いものだ。こんな藝があるとは思はなかつた』
と僕は尙ほも肖像畫に見入つた。しかし巧い拙いは分らない。妹さんの美貌に驚いたのである。素人が描いてこんなに綺麗なら、餘程の美人に相違ない。斯ういふ妹さんがゐるなら、時々遊びに來ても宜いと思つた。大變な人格者だ。

人格者問答

『大いに感心してゐるんだね』
と光岡君は滿足のやうだつた。藝術をやるものは何うしても己惚がある。僕はそこを利用して、未だ肖像畫から目を放さない。
『まるで生きてゐるやうだ』
『今に實物が出て來るよ。まあ〳〵、掛け給へ』
『有難う。これぐらゐ巧いと、貰ひ手があるだらう』
『それはあるさ』
『妹さんに感心したんぢやないよ。君の藝術に敬意を表したいんだ』
と僕は氣がついて辯解した。
『分つてゐるよ。君は人格者だから大丈夫だと思つてゐる』

『何が？』
『實は去年その手を食つて、妹を本當に貰はれてしまつたんだよ』
『誰に？』
『妹の婿にさ』
『もう定つてゐるのかい？』
『うむ。但しもう一人の方だ』
と光岡君は但しの前に少時間を置いて、僕の顏色を覗ふやうに凝つと見た。ナカ／＼人が惡い。
『九州へ行つてゐる妹さんだらう？』
『よく知つてゐるね』
『この間そんなことを言つてゐたもの』
『その妹だよ。しかし適當な奴が貰つて行つたから、苦情はない。一高時代の同級生で親父同志が懇意だ』
『それぢや君はもう義弟があるんだね』
『義弟もあれば義兄もある』
『ふうむ。姉さんもあるのかい？』
『女の中の男だよ。男の中の男をもつて任じてゐるんだけれど』

『大分戸籍が分つて來た』
『妹を貰つて行つた奴の遺口が一寸君に似てゐる。僕の繪を無暗に褒めるんだ』
『一緒にされちや困る』
『ハッハ、、』
『これはウッカリ褒められない』
『義弟の話だよ。天下一品だと言ふんだ。帝展にもこんなのは尠いと言ふんだ。僕はその頃その妹ばかり描いてゐたものだからね』
『ふうむ』
『考へて見ると、藝術の分る男ぢやない。繪よりも實物だつた』
『ハッハ、、』
『結婚してから、もう一枚大きいのを描いてやらうかと言つたら、置き場に困ると吐かしやがつた』
『ハッハ、、』
『それだから僕は妹の肖像畫を褒める人間には油斷をしない』
『參つたな、これは』
『しかし君は人格者だから、特別の例外だ』
『當らず觸らずのところで、靜物畫を一枚貰はうか？』

『何れでも持つて行き給へ』
『實際巧いよ』
と僕は書齋兼畫室を見廻した。光岡君は戸棚から三四枚引つ張り出して、無造作に並べた。無暗に描くと見えて、材料豐富だ。
足音がして戸が開いた。實物かと思つて緊張してゐたら、女中がお茶を持つて來たのだつた。
『奥さんにね、稲垣さんがお見えになつたと言つておくれ』
と光岡君が命じた。
『はあ』
『純子にも來るやうにつて』
『お嬢さまはお出掛けでございます』
『何處へ?』
『麹町へいらつしやいました』
『ふうむ』
女中は一禮して立ち去る時、光岡君が今しがた立て並べた繪を見つめて、感に入つたやうに首を傾げた。
『稲垣君』

『何だい?』
『物には柄つてものがある』
『繪?』
『柄だよ。ハンドルだ』
『ハンドルが何うしたんだい?』
『僕の繪は僕のハンドルらしい。此奴を捉へると僕を御し易い。それだから、この部屋へ入つて來るものは皆僕の繪を褒める』
『成程ね』
『女中までそれを心得てゐるんだから厭になつてしまふ』
『それが分つてゐるところを見ると、君も案外名君だね』
『案外とは何だい?』
『正直の話さ』
『ふうむ』
『未だ厭がある』
『……』
『憤つたのかい?』

『いや。氣に入つた。馬鹿だと思つてゐたが、案外然うでもないつて意味だらうから』
『早いところがその邊に歸着する』
『矢つ張り君は一種の知己だ』
『實は僕も今日は少し料簡があつてやつて來たんだよ』
『僕に見切りをつけようか何うかつてんだらう？』
『案外機敏だね』
『又案外か？　フン』
『これなら話せる』
『おい』
と光岡君は突如手を差し伸べた。僕はそれを握つて振りながら、
『匿しく置くと氣が濟まないから、悉皆胸襟を開く』
『何だい？』
『僕は今度初めて君に會つた時、考へたんだ。君は僕の兄貴の同輩だ。しかし故障があつたればこそだらう？　四年も下の僕と一緒になつたのは』
『うむ』
『然ういふ先輩と交際して宜いだらうか何うだらうかと相應頭を惱ました』

『それは君の態度で分つてゐたよ』
『しかし話して見ると惡い人間ぢやない』
『當り前さ』
『少くとも猫を被つてゐる』
『うむ。それも多少はあるかも知れない。君を人格者だと思へば遠慮する』
『僕を人格者だと思ふつてのは嘘だよ』
『言葉そのものから言へば嘘になるかも知れないが、君は僕よりも素直に進んで來てゐるから、敬意を表してゐる。これは事實だよ』
『僕は單に當り前に來てゐる丈けだ。何の取柄もない』
『それが取柄だらう。矢つ張り柄だ。ハンドルだよ。妙なものだな』
『何が？』
『實を言ふと僕は此奴と思つたんだ。此奴と言つちや惡いけれど、親愛の意味だぜ。いつかも話した通り、僕は友達つてものに懲りて、この兩三年一切拵へないことにしてゐた。しかしそれぢや淋しい。そこへ君が突然現はれたんだ。格之助君の弟だから、全然知らない顏ぢやない。話して見ると妙に惹きつけられる。そこで此奴だと思つた』
『何奴だい？』

『過去のを十把一からげに惡友として清算してしまつたが、友達なしで暮せるものでない。此奴を自家藥籠中のものにしてやらうと決心した』

『驚いたね』

『人間つてものは爲めにするところがあると、相手の柄を探す。ハンドルだ。僕は女中が油繪を眺める度に厭な心持がするけれど、考へて見ると、自分でも矢つ張り本能的にやつてゐたんだね』

『しかし僕は柄なんかない積りだ』

『ないと思つて、實は僕も困つたんだ。此奴は石つころみたいな奴だと思つた』

『ふうむ』

『八面玲瓏、玉の如くにして捉へどころが些つともない』

『持ち上げたね』

『玉だよ、實際。僕が惡玉なら、君は善玉だ。決してお世辭ぢやない。然う信じてゐる』

『唯をつけて置く』

と僕は眉毛を濕した。

『柄なんて問題ぢやない。玉なら全體を摑めば宜いと間もなく氣がついた』

『要するに取柄がないんだらう』

『いや。全人格だ。そこで君の感化を受けて勉强家になつたと言つたのさ』

『それぢやあれが手だつたのかい?』

『手にも使つたけれど、事實は事實だよ。嘘を言つても分つてしまふ。現に僕は今學期中一日休んだばかりぢやないか?』

『しかしそれが僕の感化なんてことはないよ』

『無論僕の努力もあるけれど、君といふ對象がなければ、決心が續かない。この意味で君を人格者だと言ふんだ。それが偶然柄になつたことを今發見した』

『斷つて置くが、僕を買ひ被つちや困るよ。學校を休まない位のことは小學生でも出來るんだからね』

『君は僕の事情を知らないから、そんな同情のないことを言ふんだよ』

『何んな事情があるんだい?』

『それを話すから來給へと幾度も言つてゐるのに、今まで來てくれなかつたぢやないか?』

と光岡君は憤慨が込み上げたやうに口を尖らせた。

『成程。然うだつたね』

『君は自分が當り前の事情だものだから、何でも冷淡に構へてゐるんだ』

『今日はそれも聞かせて貰ふ。悉皆胸襟を開く積りで來たんだから』

と僕は慰めるやうに言つた。

『人が容易に出來ることが僕には出來ない事情があるんだ』

『それは君がそんな詰まらない事情に重きを置き過ぎるから、自己暗示で然う考へるんだらう』
『詰まらない事情とは何だ？　君は知つてゐるのか？』
『知らないけれど、大抵分つてゐる』
『そんな論理があるものか？』
と光岡君は躍起になつた。事情といふのは幼少の頃井戸に落ちて頭を打つたことらしい。僕は光岡君のお父さんから聞いてゐるけれど、それを知つてゐるとなると、お父さんに會つたことが分つてしまふから、これは危いと思つて、
『神經衰弱だらう？』
と逃げた。
『そんな生やさしいことぢやないんだ』
『兎に角、僕は君の天分を認めてゐる。この繪にしても然うぢやないか？　人が容易に出來ないことを君は安々とやつてゐる』
『安々ぢやないよ。この爲めには一年後れるくらゐ犧牲を拂つてゐるんだ』
『學校だつて同じことだよ。本氣になつてやれば出來るんだ』
『本氣になれないから仕方がない』
『そこだよ、僕が言はうと思つて來たのは。僕はその返答次第で見切りをつける』

『何だ？　君はまだ腹が定つてゐないのか？』
『君の返答次第だと言つてゐる』
『それぢや今の握手は何うしたんだ？』
『あれは話せるといふ意味だ。話しての上で一緒にやつて行けない人間なら見切りをつける』
『君は僕の誠意が分らないのか？』
『問題が違ふ。初めから切つても切れない關係なら誠意が物を言ふけれど、關係はこれから始まるんだ。僕には僕の自由がある』
『何が氣に入らない？　言つて見ろ』
『それを言ひに來たんだ』
『言へ。さあ。言へ』
『君、光岡君』
『何だ？』
『それが友人から忠告を受ける態度か？』
『友人だか何だか分らない。君はこれからだと言つてゐる。そんな水臭い人間の忠告は受けない』
『よし。忠告はやめる』
『言はないのか？』

『言ふとも。しかし瑯め斷つて置く。僕の言ふことが間違つてゐたら、僕は君を誤解してゐるんだから、それまでの緣と思つて諦めてくれ。君を理解しない人間と交際しても仕方があるまい』
『間違つてゐたら諦める。その代り唯は歸さない』
『何うするんだ？』
『叩き踣してやる』
と光岡君は立ち上つた。今にも組みついて來さうな權幕だつた。
『おい』
『何だ？』
『君は本氣か？』
『本氣とも。僕のガでこれほど誠意を盡してゐるのに理解してくれないやうなら、もう破れかぶれだ』
『よし。お相手をしよう』
と僕も立ち上つた。場合によつては叩き伏せてやる積りだつた。高等學校時代に熱中した柔道が妙なところで役に立つ。
『言へ』
『第一から第三まである。第一に君は眞劍味が足りない。過去をよく考へて見給へ』
『第二は何うだ？』

『第一を認めてからの話だ』
『認める。第二は？』
『眞劍味が足りないから、力瘤の入れどころが違つてゐる』
『第三は？』
『力瘤の入れどころが違つてゐるから、人生を見るピントが外れてゐる』
『それから？』
『それ丈けだ』
『畜生！』
と光岡君は突如組みついて來た。
『やるか？』
と僕はガツチリ受け止めた。
『……』
『返辭をしろ』
『第一と第二は認めるに吝かでない』
『第三は？』
『ピントは外れてゐない』

と言ひさま、光岡君は僕の足を拂つた。僕は音かでないと聞いて安心したものだから隙があつた。美事投げ出されるところだつたが、光岡君は放さないでゐてくれた。制服の肩がビリビリと音を立てて綻びた。

『やつたな、この野郎』

『一寸御機嫌を伺つて見たんだ』

『さあ。來い』

『よせよ、もう』

『いや。やる』

『やつたつて、僕に勝てつこない』

『何故？』

『僕はこの爲めに一高で一年後れてゐる』

『道理で強いと思つた。初段かい？』

『三段だ』

『ふうむ』

と僕は直ぐに手を放した。此方は段違ひの資格もない。

『人生のピントは外れてゐない。第一と第二は甘受するが、第三は腕力に訴へても主張する。その意

氣込みを一寸御覽に入れたんだ』

『それぢや第三は撤回しよう。僕だつて自分のピントが合つてゐるか何うか分らない。しかし第一と第二は主張する。君と違つて、僕は一歩踏み外せば立ち行かない境遇だから、眞劍味丈けはある積りだ』

『僕も眞劍になれば宜いんだらう？』

『うむ』

『僕だつて然ういつまでもウカ〳〵しちやゐられない。君は實に分らない男だよ』

『何が？』

『又喧嘩になるといけないけれど、君は僕の努力が分らないんだ』

『分つてゐるけれど、念の爲めだ。見切るくらゐなら、態々來やしない』

『有難い』

『お互にやらう』

『今度は本當だ。刎頸斷金』

と光岡君は又手を差し伸べた。

そこへお母さんが入つて來た。光岡君が紹介してくれた。

『卓爾の母でございます。お初にお目通りを致します。卓爾が一方ならぬお世話を蔵きまして、有難

う存じます。何分唯今の通りの亂暴者でございますから……』
とお母さんは取つ組み合ひの光景を硝子越しに見てゐたのらしかつた。僕は四角張つた挨拶と來ると、口上が出澁るのみならず、受け答へも覺束ない。斯ういふ場合をもう少し修業しなければいけないと思つて、お辭儀ばかりしてゐた。
『お母さんも稲垣君も初對面ぢやありますまい』
と光岡君が口を出した。
『何故？　卓爾』
『家のものは皆僕を馬鹿だと思つてゐるんです』
『初對面に相違ないぢやありませんか？　稲垣さんが御迷惑なさいますよ』
『宜いですよ、もう』
『稲垣さん、斯ういふ我儘者でございますから』
『宣傳はもう御無用に願ひます』
『分つてゐますわね。稲垣さんの肩の綻で』
とお母さんもナカ〳〵負けない氣の人らしい。
『柔道の型をやつたんです』
『稲垣さん』

『はあ』
『ミシンをかけさせますから、一寸お脱ぎ下さい』
『いや。結構です』
と僕は辭退したが、
『然うして貰ひ給へ。その間外套を着てゐれば宜い』
と光岡君が勸めたので、仰せに從つた。お母さんは僕の上着を持つて出て行つた。
『嚴しいね』
『母はあれだから困る』
『いや。君の方だよ。あれがお母さんに對する普段の態度かい？』
『然うでもないけれど』
『もつと穩かに出る方が宜い』
『矢つ張り君は賴まれてゐるんだね』
『何を？』
『初對面ぢやないんだ』
『そんなことはないよ。妙に疑るんだね』
『僕が馬鹿になつてゐれば宜いんだ』

『何だか次第が分らない』
と僕は誤魔化したが、光岡君はお父さんが僕のところへ頼みに來たことを感づいてゐるやうだつた。
程もあらせず、お母さんが手ぶらで戻つて來た。
『裁縫師が未熟で少し手間が取れさうでございますから』
と會釋して、椅子に掛けた。
『御面倒をおかけして濟みません』
『何う致しまして』
『お母さん、純子は又麹町へ行つたんですか？』
と光岡君が如何にも不服さうに訊いた。
『はあ』
『よくあんなところへ行くんですね』
『あんなところつて、お前、姉妹ぢやありませんか？　行つたり來たりするのが當り前でせう』
『しかしお母さん、僕は斷つて置きますよ。麹町の兄貴とは絶交したんですから、純子が麹町の世話でお嫁に行くやうなら、僕は承知しません』
『そんなお話は後からにして下さい。お客さまの前ぢやありませんか？』
『はあ。分つてゐますけれど』

『お前にも相談しますよ、何があつても』
『然う願ひます。僕は馬鹿扱ひにされるのが一番辛いです』
『そんな扱ひを誰がしてゐますか？』
『お母さんがしてゐます』
『まあ』
『僕、憤つてゐるんぢやありません。お母さんのお心持はよく分つてゐます。唯麹町あたりと違つて發表が下手ですから、一々突つかゝるやうに取られるんですけれど』
『そんなことは今でなくても宜いぢやありませんか？』
『その通り壓迫です。僕の不德の致すところで仕方ありはせんが、僕は二十五になつても子供扱ひです』
『何うして？』
『お母さんは僕のことを稲垣君のところへお頼みにお出になつたでせう？』
『そんなことはありませんよ』
『お頼みになつても宜いんです。不成績の致すところで仕方ありませんが、目の前で芝居をされてゐると思つたら、情けなくなりました』
『何ういふ芝居をしましたの？』

『打ち合せて置きながら、初對面だと仰有いました』
『初對面でございますよ、本當に』
『光岡君、僕はお母さんに初めてお目にかゝつたんだよ。變な誤解をされちゃ困る』
と僕も默つてゐられなかつた。
『本當かい？』
『嘘をつくものか？』
『それなら宜い。お母さん、僕が惡かつたです』
『何うしてお前はそんなに僻むやうになつたんでせうかね？』
『濟みません』
『お母さんこそ情けなくなりますよ』
と恨んで、お母さんは僕の顏をチラと見た。それはお父さんが頼みに出向いたことを絶對秘密にといふ意味だつた。
光岡君は機嫌を直して話し始めた。お母さんに對する態度も僕の第一印象を裏切つて、極く打ち解けてゐた。
『お母さん、僕はもう少しで稲垣君と絶交するところでした。取つ組み合ひになつたんです』
『お前は取つ組み合ひと絶交の名人ですからね』

『しかし麹町とは相手の人格が違ひます』
『麹町の方はお母さんがお預りよ』
『はあ、憎い奴ですけれど、お母さんのお顏を立てます。あやまらして下さい』
『兄さんをあやまらせるつて法はありませんわ』
『あんな奴は何うでも宜い』
『二十五にもなつて、取つ組み合ひをする人なんかないでせうね。これからは氣をつけて下さいよ。初めてお出下すつた稲垣さんぢやございませんか？』
『もう徹底的に理解がつきました』
『洋服を破つたりして、私、お詫びを申上げなければなりません』
『口惜しかつたものですから、つい組みついたんです。稲垣君が僕の弱點を指摘してくれました。それが圖星だつたから、發條が彈けたんです』
『何ういふ弱點？　何の口？』
『お母さんが始終仰有つてゐることですよ』
『矢つ張りね。それで嫌疑をかけたんですわね』
『はあ。僕は眞劍味が足りないと言ふんです。それだから力瘤の入れ所が違つてゐると言ふんです』
『よく見ていらつしやいますわ』

『一言もなかつたです』
『それで手出しをしたの？』
『はあ』
『乱暴ね』
『しかし稲垣君には敵ひません。誠意のないものは組みつかれると、辯解しますけれど、稲垣君は却つて掛つて來るんです。僕はこの弱點を改める約束をして堪忍して貰ひました。もう刎頸斷金の友人ですから、お母さんも御安心下さい』
『宜うございましたね』
『斯うなれば、何方が何方の頭を一つや二つ撲つたつて、もう問題は起りません』
『それがいけませんのよ』
『ハッハ、、』
『稲垣さん』
『はあ』
『御親切に甘えて、我儘ばかり申上げます。本當に相濟みません』
『いや。我儘はお互つこですよ』
『お蔭さまで今度こそは眞劍になりさうでございますから、何うぞこの上も宜しくお引き廻しをお願

ひ申上げます』
『いけません。餘りお賴みになると、又芝居だと思はれますから』
と僕は眞面目に冗談を言つた。
『オホ、、、』
『引き廻すなんて柄ぢやありませんけれど、お互に一生懸命になつて勉强したいと思つてゐます』
『何分宜しく』
『僕の方からお願ひ申上げます』
『もつと身に沁みてお賴み申上げたいんですけれど、御本尊さまが控へてゐますから。オホ、、、』
とお母さんも打ち興じた。
『愉快だなあ。氣の合つた友達と一緒になつてお母さんが笑つてくれるなんて』
と光岡君は滿足のやうだつた。
『お父さんもお家だと宜いんですけれど』
『いや、お父さんが出ると、稲垣君は窮屈がります。あれは青年つてものに理解のない人ですから』
『そんなことはありませんわ』
『純な青年に理解がないと訂正しませう。麹町が特別お氣に召してゐるやうですから』
『お預けよ、そのお話は』

『あんな奴は何うでも宜いけれど、純子は惜しいことだな。僕が稲垣君のことばかり言ふものですから、會ひたがつてゐるんです』

『今に參りますよ』

『でも麹町へ行くと、いつも日の暮れになります』

『先刻歸つたのよ』

『それぢや呼んで下さい』

『手間がかゝるのね。あれぐらゐの綻を縫ふのに』

と言つて、お母さんは光岡君の机邊を見返つた。光岡君は意を體して、直ぐに電鈴を押した。

女中が僕の上着を亂れ箱に入れて現れた。お母さんは一應檢めて、

『お待たせ致しました。何うぞ』

『お手數をかけて申譯ありません』

と僕は大急ぎで着替へた。綻を縫つて貰つたばかりでない。アイロンがかけてあつた。

『純子に直ぐ此方へと言つて下さい』

とお母さんが女中に命じた。

僕は何となく落ちつかない心持になつた。多少人格的に自信があつても、胸には矢張り青春の血が躍つてゐる。若い麗人に改まつて紹介されるとなると、好い印象を與へたい。

『純子は君に敬服してゐるんだよ』

と光岡君が沈默を破つた。僕はつい考へ込んでゐたのだつた。

『敬服される道理もないぢやないか？　未だお目にかゝらないんだから』

『今までに僕に感化を與へた人間は君丈けだからさ。稀に見る人格者だらうと言つてゐる』

『大變なことになつてしまつた』

『君は僕の怠けてゐた時代を知らないから、何でも簡單に片付けるけれど、僕の更生一新は親類中の評判だ。何うした風の吹き廻しだらうと言つて不思議がつてゐる』

『話が大きい』

『その大風が君だから、然う聞けば、誰でも期待する』

『本當でございますよ、稲垣さん。私も何んなお方かと存じて興味を持つてお待ちしてゐました』

とお母さんも主張した。

『しかし幻滅でせう』

『それほどでもございませんけれど』

『はゝあ』

『宅に支那の畫家の描いた孔子さまの像がございます。それが頭にあるものですから、お若いのに驚きました』

『ハッハ、、』
『オホ、、、』
『稲垣君、これは母の傑作だ』
と光岡君が喜んだ。
人格者は忽ちキッと構へた。戸が開いたのである。しかし又女中だつた。お母さんのところへ進み寄つて耳打ちを始めた。
『何うして?』
『……』
『まあ』
『……』
『むづかしい人ね』
『……』
『然う? それなら仕方ありません。私、今直ぐ參りますからつて』
といふ要領だつた。
『來ないんですか?』
と光岡君が訊いた。

『はあ。頭痛がするさうです』
『何うしたんでせう?』
『風氣のやうでしたからね。それで早く歸つて來たんでせう。大したこともありますまいけれど、私、行つて見てやりませう。稲垣さん、何うぞ御ゆつくり』
とお母さんは急いで立ち去つた。
僕は失望した。しかし人格者になり切つてゐたから、
『虎口を逃れた』
と呟いた。
『何も恐れることはない』
『面倒だよ。お母さん丈けでも可なり氣骨が折れる』
『君は社交が好きつて方ぢやないね』
『寧ろ嫌ひの方だらう』
『力瘤の入れどころが違ふと言ふかも知れないが、これからの青年は婦人と交際する必要もあるぜ』
『僕は何ういふものか、妙齢の婦人に興味がない』
『嘘をつけ』
『本當だよ』

『それぢや年増が好きだね。性が悪い』

『まして況んやさ。女性つてものゝ魅力を餘り感じない性分らしい』

『矢つ張り僕と違ふな』

『少しは違ふところがないと感化が出來ないよ』

『やつたね。ハツハヽヽ』

『ハツハヽヽ』

『孔子さまは威張るものぢやない』

『あれは嚴しかつた』

『顏が少し似てゐるよ。今度見せてやる』

と光岡君も僕を孔子さまにしてしまつた。

お母さんはもう出て來なかつた。女中が出入りして接待に努めた。可なり話し込んでから、僕はもう歸る積りだつたが、引き留められるまゝに喋べり續けた。光岡君は麹町の姉婿を扱き下した。正月意見されてから仲違ひを續けてゐるのらしい。これは僕がお父さんから聞いたところだつた。姉も連れ添ふ他人の味方になつて、弟を馬鹿にするから癪に障ると敎圍いた。妹達丈けは感心だとあつて、又純子さんの話になつた。

『しかし君、それが純子さんに對する君の態度かい?』

と僕は純子さんの油繪に目を移した。或はもう頭痛が直つてゐるかも知れないと思つたのである。

『何が?』

『見に行つてやり給へ。加減が惡いと言つたぢやないか?』

『うむ。行つて來る。食事を命じながら』

と光岡君は立つて行つた。

僕は獨り殘されて、部屋の中を見廻した。矢張り油繪が目につく。純子さんのばかりでない。靜物も風景もナカ〳〵巧い。動物寫生帳といふのがあつた。牛や馬が描いてある。撥つてゐたら人物が出て來た。青年だ。『麹町の馬』と銘が入れてあつた。

『これだな』

と僕は思つた。

『何を見てゐるんだい?』

と光岡君が戻つて來た。

『麹町の義兄に見參してしまつた。才人らしい風貌だね』

『奴、それでお冠を曲げたんだよ』

『氣に入らないのかい?』

『動物寫生帳に描いたつてのが苦情さ。僕はうつかりしてゐたんだ。つい手近にあつたから、これへ寫生したら、卓爾さんは俺を侮辱してゐると姉に言つた。姉が又馬鹿だよ、それ丈けの用件で僕のところへやつて來て叱りつけたから、僕はこの通り畫題を書いてやつた』

『君も好くない』

『偶然だと言つたんだけれど、あやまれと言ふんだ。兄弟同志であやまるほどのことでもあるまい?』

『さあ』

『義兄はその意趣晴らしに父親の前で僕に忠告したんだ。動機が間違つてゐる』

『何方も何方だな』

と僕は呆れ返つた。

『君』

『何だい?』

『人のことよりも自分だぜ』

と光岡君はニヤ〳〵笑つた。

『何が?』

『純子は君を人格者と認めないと言つてゐる』

『え?』

『ハツハ、、』

『別に人格者をもつて任じてゐるんぢやないけれど、何うかしたのかい?』

『僕は君の爲めに辯解して來たが、君はポケットに何を入れてゐる?』

『ポケット?』

『うむ。純子は綻びを縫ふ序に、ポケットの中を檢めたのらしい。これも人格者のすることぢやないが、妹は君と違つて任じてゐないから、罪がない』

『僕だつて、任じてはゐないと言つてゐる』

『讓歩し始めたぜ。女給から來た手紙でも入つてゐるんぢやないか?』

『冗談言つちやいけない。後暗いところは些つともない』

と言つて、僕は胸のポケットを叩いて見せた。外には萬年筆が挾んである。內には手帳が入れてある。他に何もない。

『兎に角、純子は何か發見したのらしい。それで出て來ないんだ。頭痛でも何でもない』

『出て來なくても宜いさ。僕は妹さんに會ひに來たんぢやない』

『それにしてもさ。僕は君を自慢にしてゐる丈け面食つたよ』

『驚いたな、これは』

『お釋迦さまでも氣がつくめえだ』

『何が？』
『孔子さまのポケットに桃色の角封筒が入つてゐるなんてことは』
と光岡君も何うやら問題にしてゐるやうだつた。
『おい』
『何だい？』
『君は本氣でそんな變なことを言ふのかい？』
『疑ひはしないが、これで僕も少し寛ろげる』
『何うして？』
『君が些つとも融通の利かない聖人君子だと、僕は息がつけない』
『人格を主張するんぢやないけれど、念晴らしだ。ポケットの内容を檢めて貰はう』
『それには及ばないよ。此方の想像に委せて置いてくれ給へ』
『變な想像をされちや困る』
と僕は上着のボタンを外して、兩手を高く上げた。
『ホールド・アップか？』
と光岡君は先づ胸のポケットを檢めた。萬年筆と手帳、それから受取が一枚。
『時計屋の受取だね。一年間保險。只で直して貰へるんだね』

『手帳の中を讀んでも宜い』
『然うまでは疑はない』
『兩脇のポケットは何うだ？』
と僕は手品使のやうに得意になつて捜させた。
『あつたぜ』
『何が？』
『これは何だい？』
と光岡君は映畫女優の繪ハガキを僕の鼻先へ突きつけた。
『ふうむ』
『君が書いたんだ』
『占まつたな。今朝出す積りで忘れてゐたんだよ』
『〇〇〇だね。君もあれが好きか？』
『好きつてことはない。帝展の繪ハガキと同じ意味で通信に使ふ丈けさ』
『今更辯解しても駄目だよ。「京都にはこんなのはゐまい。僕はこの間の晩銀ブラに出掛けで、實物を拜んだよ。迚もキレイだ。以來僕の渴仰する美の女神はこれなり。喝！」とは何うだ？　何が喝だい？』

『冗談に書いたんだよ。その證據には此方の名前が單にN生となつてゐる』
『こんな文句を書いて署名するやうなら立派なキ印だらう』
『友人を驚かしてやる積りさ』
『京都だね？　相手は』
『郷里の高等學校の同級生で京都の法科にゐる奴だ。京都の女優の寫眞を頻りに寄越すから、此方も負けない氣になつて、一矢酬いたに過ぎない』
『これなら誰でも驚くよ』
『この文句を純子さんが讀んだのだらうか？』
『讀んだから人格者でないと認めたのさ』
『驚いたなあ』
と僕は額を叩いて、長嘆息した。
又足音がして戸が開いた。女中の積りで知らぬ顔をしてゐたら、お母さんと純子さんだつた。
『稲垣君だよ。純子です』
と光岡君が紹介した。僕は悉皆虚を突かれた。上着のボタンをかけながら、
『何に分宜しく』
とお辭儀をした。

『何うぞ』
とお母さんが椅子を薦めた。腰を下してから氣がつくと、問題の繪ハガキがそのまゝ卓子の上に殘つてゐた。裏になつてゐれば宜いのに、意地の惡いものだ。女優は純子さんのところから丁度見頃の角度に而も眞正面を向いてゐる。
『同郷同窓で今度又一緒になつた稲垣君だよ』
と光岡君は紹介の繼ぎ足しを始めた。
『はあ』
『兄さんが始終お世話になつてゐる』
『はあ』
『秀才で人格者だ』
『はあ』
と純子さんはその都度頷いたが、繪ハガキの方を見てゐるやうだつた。僕はチラとお母さんを顧みた。お母さんは繪ハガキを見てゐるばかりでなく、ニコ〳〵笑つてゐた。

光岡君の骨相學

僕は誘はれるまゝに光岡君のところへ度々遊びに行くやうになつた。此方の都合で斷つても、光岡

君は承知しない。
『それぢや約束が違ふぜ』
『何故？』
『刎頸斷金は何うした？』
『仕方がない』
『來給へ』
『うむ』
光岡君は刎頸斷金で押し通す。
『その代り僕も君の力になるよ』
『お互にね』
『君を苛める奴はゐないかい？』
『苛める？』
『うむ。學校の歸りに君に喧嘩を吹つかける奴があつたら、僕に言ひつけ給へ。僕が撲つてやる』
『小學生ぢやあるまいし』
『ハツハヽヽ』
『君は柔道が強いから、喧嘩も強いだらうね？』

『負けたことはない。勝つまでやるから』
『中學時代には大分やつたさうだが、この頃は何うだい？』
『實はこの間の晩やつたんだよ』
『ふうむ』
『何うも僕は詰まらないことで眞劍になる癖があつて困る。電車の中で僕の眞向ひの紳士が唾を吐いたんだ。初めは大目に見てゐたけれど、再三やつたから、つい注意してやつた。するとその隣りの男が「餘計なことだ」と僕を極めつけた。同伴だつた』
『それで？』
『默れ！　默らん。と來た。此方は望むところぢやないが、賣る喧嘩なら買つてやる。「文句があるなら、こゝは狹いから外へ出ろ。」「出るとも」と先方も行きがかりだ。「君、君、馬鹿に構ふな。」と唾を吐いた男が言つた。斯うなると、もう後へ引けない』
『撲つたのかい？』
『いや。電車の中だから、皆が迷惑する。僕はもう沈默を守つた。次の停留場に着いてから、やる積りだつた。しかし車が止まつても相手は知らん顏をしてゐる。僕はその次で下りるんだけれど、目黑の終點までついて行つた。鬼をつけなければ、虫が納まらない』
『矢つ張り力瘤の入れどころが違つてゐる』

『冷靜に考へれば、然うかも知れない。しかし公衆衛生の爲めに注意してやつて、馬鹿呼ばりをされたんだからね。人格者の君なら、度し難い奴だと思つて笑つてゐるだらうが、僕はそれほど悟り切れない。目黒で下りると直ぐに、年長の奴の胸倉を取つて「君、馬鹿とは何です？」と穏かに反省を求めた。斯ういふ時には敵本だ。右の拳はもう一人の奴の横つ面を狙つてゐる』

『餘り穏かでもないぜ』

『口で言つて分らなければ仕方がない。國家でも個人でも同じことだ。最後は腕力さ。しかし大抵はそこまで行かなくて濟む。もう一人の奴が慌てゝ辯解を始めた。實は僕達は會社の歸りに一杯やつて醉つてゐるんですからと言つて、ペコ／＼するんだ。馬鹿呼ばりをした奴も態度が一變した。これが上役で、加勢をした方が下役らしい。結局、二人とも粗忽を詫びた。それでも一つぐらゐ撲つてやる。値打は充分あつたんだけれど、人立ちがして巡査が寄つて來たから、穏かに堪忍してやつた』

『君は時々そんな喧嘩をするのかい？』

『月に一遍ぐらゐやる』

『驚いたな。これは。尤も組みつく名人だつてお母さんも言つてゐたし、僕にも組みついた』

『ハッハ、、』

『電車の中で喧嘩をおつ始めるんぢや一緒に歩けない』

『しかしいつも正義の爲めの喧嘩だから、決して迷惑はかけない』

『それにしてもさ。見つともないよ』

『體裁なんてことは忘れてしまふ。僕は正義性が特別に強いのらしい。それだから、人の不都合を見ると默つてゐられなくて、つい口を出すんだ。相手が素直に反省してくれゝば無事に納まるけれど、數の中には誤解する奴があるから、つい議論になる。大抵議論で片付くけれど、中には好い幸ひにして喧嘩を賣る奴がある』

『何方が賣るんだかね』

『無論先方が賣るのさ。此方は正義だけれど、賣りかけられゝば、この野郎つて氣になる。爭鬪性が著しく發達してゐる悲しさ、いざとなれば逃げ切れない。考へて見ると、子供の時井戸に落ちたのが種々の方面へ祟つてゐる』

『君は思はしくないことは何でもその特別事情に托けるんだね』

『事實だから仕方がない。醫者が匙を投げて、直つたところで馬鹿か狂人になると診斷したんだ。九死一生の重態だつたから、影響があるに定つてゐる』

『それが自己暗示だと言ふんだよ』

『君は研究が足りない。僕は自分のことだから確かだ。頭をひどく打つてゐて、一週間も昏睡狀態が續いたんだから、震盪の程度が察しられる。以來四十二區の發育が均等を缺いたのは當り前さ』

『何だい？　四十二區つてのは』

『知らないのかい？　東京市が三十五區に分れてゐるやうに、人間の頭の中は四十二區に分れてゐる』
『うむ骨相學か？』
『然うさ。正義性もその一區、爭鬪性もその一區だ。君のやうに頭を打つたことのないものは各區の發達が均等に行つてゐるから、努力がし易い。學問だつて人格だつて、上げようと思へば難はない。しかし僕は違ふ』
『何う違ふ？』
『斯うやつて首を振つても、頭の中がゴトツと言ふことがある。各區の均等が取れてゐないのらしい』
『それが自己暗示だよ』
『いや。井戸に落ちて打つた時、ひどく響いたところが麻痺してしまつて、その代りに他のところが特別に發達したんだ。それが妙だよ。正義性は結構だけれど、爭鬪性だの破壞性だの戀愛性だのといふ厄介なものばかり無暗に強くなつてゐる』
『馬鹿ばかり言つてゐるぜ』
『事實だから仕方がない。僕は研究してゐるんだ。自己暗示でも何でもない。今日はそれを話す。君は僕の善導係を引受けてくれた。父も母も喜んでゐる。しかし僕の頭の中の四十二區を充分調査して置かないと責任が果せないぜ。來給へ』
僕は光岡君の家へこれでもう五六回行つた。二度目に訪問した時は日曜だつたから、お父さんにお

目にかゝつた。光岡君が紹介してくれた。約束だから、何方も初對面の風を粧つた。お母さんも同席して話し込んだ。
『卓爾を前に置いて斯う言ふと氣を惡くするかも知れませんが、稻垣さん、一つ善導係をお引受け下さい。卓爾・宜からうな？』
とお父さんは僕と光岡君へ相談のやうにして持ち出した。
『結構です』
『お前は今まで友達が好くなかつた』
『はあ』
『好いのもあつたらうけれど、惡貨が良貨を驅逐するといふ形だつた』
『お父さん』
『何だね？』
『今日は座談つてことに願ひます』
『よし〳〵。お設法はしない。お話を承はつて見ると、稻垣さんとは親同志萬更知らぬ顏でもない』
『お父さんは矢つ張りもう時勢の人ぢやありませんな』
『後れてゐると言ふのかね？』
『はあ』

『何故？』
『僕の方が早手廻しです。もう善導係をお頼みしてあります』
『それは宜かつた。俺からお願ひしても、お前がその氣にならなければ、効果が擧がらない。何うやらこれで本調子らしい』
『僕だつて自分のことですから考へてゐます。その點はもう御安心下さい』
と光岡君は得意のやうだつた。お父さんに先を越されてゐるのに氣がつかない。非常に鋭いところがあると同時に全然間の抜けてゐるところもある。
『善導係なんてことは僕の力ぢや迚も覺束ないと思ひます』
と僕は謙遜した。
『感化係で結構です』
『それも柄でありません』
『兎に角、大體然ういふ御方針でお願ひ申上げます』
『駄目です』
『制動手ですよ、あなたは。卓爾といふ車は無軌道です。時々突拍子もない速力を出して方角違ひへ走りますから、その折、人格者のあなたが制動機をかけて下されば宜しい』
とお父さんは僕に多大の期待を置いてゐる。

『稲垣さん、何うぞ宜しくお願ひ申上げます』
とお母さんも言葉を添へた。
『お役に立つか何うか分りませんけれど』
『お氣づきの點は御遠慮なしに仰有つてやつて下さいませ』
『はあ。及ばずながら』
と僕は制動手の役目を引受けた。要するに善導係だ。乘りかけた舟で仕方がない。人間は煽てられると本氣になる。人格者をもつて任じてゐるのでもないが、それぐらゐのことなら、何うやら勤まりさうな心持がしたのである。
斯ういふ次第だつたから、僕は光岡君が喧嘩口論を好むと聞いて少し驚いた。早速制動手の仕事が一つ殖えたと思つた。一緒に勉强して停滯なく卒業さへさせれば宜いのだらうと單純に解釋してゐたが、成程、それでは進行係だ。お父さんが特に制動手と註文をつけるからには、その必要があるのらしい。同時に僕は兄貴が手紙で注意して寄越した事柄を思ひ出した。見かけは大分落ちついてゐるやうだが、大將、矢張り中學時代の連續かも知れない。然うだとすると、以來高等學校大學と甲雖經てゐる道理だ。自分でも破壞性と戀愛性が無暗に發達してゐると言つた。これはいけない。制動手の仕事が忙しくなる。頭の中の四十二區、僕はそんなものは認めてゐないが、本人がそれによつて主張すれば、大體の形勢が分る。隨つて善導上の手掛もつく。丁度好い機會だと思つて、誘はれるまゝに、

その日放課後、殆んど一日置きだつたけれど、又お供をした。

純子さんが迎へてくれた。初對面に女優の繪ハガキで悪い印象を與へてゐるから、僕は氣が引ける。お母さんにも話したらうと思ふと、面映い。あれは確かに大きな失策だつた。しかしその後純子さんの態度を觀察してゐるが、意を強くするに足るものがある。お邪魔をする度に光岡君の書齋兼畫室へ現れて、快よく斡旋してくれる。二人の話にも時折仲間入りをする。頭の好い令嬢だ。光岡君の描いた肖像畫よりも更に美しい。天工は矢張り人工に勝ると思つた。但し僕は純子さんに好かれようといふ野心を持つてゐない。これは自分にも斷つてある。人格者として紹介された手前、そんな努力はしない決心をしてゐる。光岡君の善導が目的だ。お父さんお母さんから頼まれてゐるし、本人と肝膽相照らすところもある。それは光岡君が何處までも純眞なことだ。別に取柄のない僕を重んじてくれる。此方も知己を感じないではゐられない。晏如として刎頸斷金を誓つたのには、そこに何かある。

『純子や』

『はあ』

『今日は稲垣君と喧嘩になるかも知れないから、よく監督しておくれ』

と光岡君は冗談を言つた。

『まあ！』

『ハツハ、、、』

『一昨日は失禮申上げました』

と僕は純子さんに挨拶する機會を得た。

『何う致しまして。私こそ』

『頻繁にお邪魔申上げます』

『一向お構ひ申上げませんから、何うぞ御遠慮なく』

『もう喧嘩は致しません。御安心下さい』

『オホ、、、』

と純子さんは初對面の日を思ひ出したのらしい。餘計なことを言つてしまつた。

『又洋服が破れるからね』

と光岡君は人が悪い。

『ハツハ、、』

『しかし純子は君の人格を認めてゐる』

『何うでも宜いよ、そんなことは』

『先づあれぐらゐなところだらうつて』

『兄さん』

と純子さんは光岡君を睨んで、逃げるやうに引き退つた。

『詰まらないことを言ふなよ』
と僕は故障を申入れた。
『ハッハ、、』
『僕は構はないけれど、純子さんが迷惑する』
『しかし信用を回復したよ』
『そんなことは問題ぢやない』
『純子が出て來て接待役を勤めるのは君丈けだ。見識の高い奴だから、厭だと思へば、僕から頼んだつて承知しない。特別に敬意を表してゐるんだ』
『君が馬鹿ばかり言ふものだから、憤つて行つてしまつた』
『又來るよ。ところで僕の頭の解剖だ』
と光岡君は早速本題に移つた。本當に研究してゐるのだつた。專門の書物を擴げて、圖解について説明を始めた。成程、頭の中が四十二區に分けてある。第一區が戀愛性、第二區が夫婦和合性、第三區が親性愛性、第四區が友情性……
『この邊だね、これは皆』
と僕は後頭部に手を當てた。
『發達してゐるかい?』

『さあ』
『見てやらう』
と光岡君は僕の頸のあたりを探つて、
『手答へがある。殊に戀愛性が發達してゐる。迚も僕の及ぶところでない』
『冗談言つちやいけない』
『ハッハ、、』
『しかし外からぢや分るまい』
『分るさ。骨相學だもの。發達してゐるところが出っ張つてゐる。君は人格者だから、鷙性や敬虔性が發達してゐるに相違ない』
『何處だい?』
『十九と二十だ。この邊だよ。そら、出っ張つてゐる』
『成程』
『相接して慈愛性』
『痛い〳〵』
『押して見たんだ。こゝは凹んでゐるぜ』
『發達が悪いのかい?』

『うむ。僕に同情してくれない筈だ』
『それから？』
『理想性、建設性、莊嚴性、流石だよ。好いところが皆顯著な突起を示してゐる』
『人格性つてのはないかね？』
と僕は光岡君のところへ行くと、兎角人格が氣になる。
『個人性つてのがある。この邊だ。君のは至極穩かだ。僕のは癖になつてゐる。それだから自我が強い』
『もう宜いよ』
『待ち給へ。悉皆調べてやる』
『それぢや手軟かにやつてくれ。毛を引っ張るから痛い』
『序に蚤を取つてやるんだ』
『馬鹿にするなよ』
『形狀性、色彩性』
『そこは目ぢやないか？』
『目の近くだ。この邊一帶の發達が惡い。君は繪心がないだらう？』
『うむ』
『算當性。こゝも手答へがない。君は數學で落第點を取つたことがあるだらう？』

『いや、數學は得意の方だつたよ。もう忘れてしまつたけれど』
『それぢや忘れたから凹んだんだ』
『好い加減なものらしいね、これは』
『時間性、音調性。これも發達が鈍い。音樂が分るまい？』
『音樂は好きだよ』
『好きでも自分ではやるまい？』
『うむ』
『それだから餘り發達してゐないのさ』
『巧く誤魔化した』
『人間性。おや！』
『何だい？』
『こゝはゼロだよ』
『馬鹿を言へ』
『本當だ。勉強ばかりしてゐて人間味がなくなつたんだ。堅實性。その代りにこゝが突起してゐる』
『そんなチラッポコを言つても駄目だよ』
『しかし一番發達してゐるのは流石に矢つ張りこの邊だよ』

『何處だい？』
『戀愛性』
『痛い！』
『毛を三本拔いたんだよ。猿は人間に三本足りないといふから』
『もう宜い』
『待て／＼』
と光岡君は放さない。
そこへ純子さんが入つて來て、
『あらまあ！』
と驚いた。
『喧嘩ぢやないよ。蚤を取つてやるんだ』
『よせよ、もう』
と僕は振り拂つて、髪の毛を掻き上げながら、
『骨相を見て貰つたところです』
と說明した。
『まあ』

『喧嘩だと思つたかい？』
と光岡君が訊いた。
『はあ』
『矢つ張り信用がないかな？』
『ございませんわ』
『おや／＼』
『稻垣さんですから大丈夫と存じましたけれど』
と純子さんは僕に會釋して、お茶を薦めてから、
『兄さん、美千代さんがお見えになつていらつしやいますよ』
と傳へた。
『ふうむ。珍らしいね』
『叔母さんも御一緒ですから、一寸御挨拶を申上げるやうにつて、お母さんが仰有つてゐます』
『此方へ來て貰はう』
『叔母さんも』
『美千代さん丈けさ』
『然うは參りませんわ』

『斯うつと。困つたな、これは』
『僕、失敬しても宜いよ』
と僕は氣を利かす積りだつた。
『構はないよ』
『何うぞ御遠慮なく。家の方の客でございますから』
と純子さんも寛ろがせてくれた。
『それぢや一寸顏を出して來ようか？』
『然うして戴きませう。お客さまが見えていらつしやいますつて、私、申上げて置きましたから、お顏出し丈けで宜うございます』
『お前、後から美千代さんを此方へ引つ張つてお出』
『さあ』
『宜いだらう？』
『姉さんも見えていらつしやいますのよ』
『千客萬來だね。兄貴はまさか來ちやゐまいね』
『姉さん丈けよ』
『あやまりに來たんだらう』

『兄さんの方からおあやまりにならなければ駄目ですわ』
『お前はこの頃先方組だね』
『中立よ、初めから』
『稻垣君、一寸失敬する』
『何うぞ』
『純子と話してゐてくれ給へ。簡單に切り上げて來るから』
と斷つて、光岡君は立つて行つた。
僕は純子さんと二人きり取り殘されて、少時沈默を守つてゐたが、何うも態とらしく落ちつかないから、
『僕、この本を拜見してゐますから、何うぞ御遠慮なく。お客さまで御多忙でせう』
と申出た。擊退したくはないけれど、この邊が作法だらうと感じた。
『いゝえ、構ひませんのよ』
『しかし……』
『……』
『姉さんがお見えになつていらつしやるんでせう？』
『はあ』

『お話がございませうから、何うぞ』
『實は私……』
『はあ？』
『差出がましいやうですけれど、姉のことでお願ひがございますの』
『はゝあ』
『兄さんは麹町の兄のことを何かお話申上げませんでしたか？』
『承はりました』
『この春から仲違ひをしてゐます』
『そんなお話でした』
『何う考へても兄さんの方が悪いんでございますから、兄さんの方から和解を申出るやうに、お勸めして戴けませんでせうか？』
『さあ。僕、詳しいことは存じませんが、問題が餘程紛糾してゐるんぢやありませんか？』
『麹町の兄は眞面目一方で、何方かと言へば、冗談の分らない方でございます。此方の兄さんは又あの通りの性格ですから、遠慮を致しません。誰ひ過ぎたんでございます』
『しかし光岡君の方にも大分言分があるやうでした』
『それは言分を拵へることにかけては名人でございますから』

『一體喧嘩がお好きのやうですな』
『はあ。困ります』
と純子さんは敢て吹聽はしないが、確實に認めてゐるやうだつた。
『兎に角、僕は光岡君の友人として、光岡君の方からあやまるやうにとは言へません』
『矢つ張り麹町の方からあやまらなければ駄目でございませうか？』
『兩方から折れ合つたら宜いでせう』
『それぢや然ういふことにお勸めして戴けませんでせうか？』
『しかし僕よりもお父さんお母さんから仰有る方が早いです』
『もう度々仰有つたんですけれど、何方も相手があやまらなければ厭だと申します。麹町の兄は兎に角、姉が承知しません。間に立つて執成す人がいつまでもお冠を曲げてゐるんでございますから』
『姉さんもナカ〳〵勝氣のお方と見えますね』
『はあ。困ります』
『有閑家庭の人は何うも皆我儘です』
『恐れ入りました』
『これは失禮』
『オホ、、、』

『あなたは例外です。兄さんが始終褒めてゐるくらゐですから』
『私は何方でも宜うございますけれど、唯今お願ひ申上げたこと、何分宜しく』
『折を見てお勸めする積りですけれど、大將、ナカ〳〵强情ですからね』
『あなたを信じていらつしやいますから、あなたから仰有つて戴けば、屹度利き目があります。實は私、姉にもあなたのことをお話し致しました』
『はゝあ』
『人格者で兄さんの感化係ですからつて』
『迚も〳〵』
『姉があなたのお噂を申上げたら、兄は首を傾げて、それは怪物だらうと不思議がつたさうでございます』
『何故でせうか？』
『兄さんに感化を與へる人は絶對にないことに定つてゐましたから』
『成程』
『そんな人格者なら兎に角一遍お目にかゝつて置きたいと申してゐるさうでございます』
『大變な誤解ですよ』
『その中に麹町の兄が内證でお伺ひするかも知れませんから、何うぞ宜しくお願ひ申上げます』

『困りますね』
『和解のことを御相談申上げたいんでございませう』
『僕、そんな期待をされては戸迷ひをしますけれど、兎に角、光岡君の親友としてお話を承はれば、又何か工夫がつかないとも限りません。努力丈け致しませう』
と僕は引受けた。
『有難うございます。本當に御面倒ばかりお願ひ申上げます』
『いや、一向お役に立ちません』
『……』
『……』
『それは然うと、兄さんは彼方で話し込んでしまつたと見えてナカ〳〵戻つて參りませんわ』
『あなたも何うぞ』
『いゝえ。私、此方の方が勝手でございますから』
『……』
『丁度好い幸ひに、もう一つ御參考の爲めに申上げませうか？』
『何うぞ』
『私、人さまの陰口をきく氣はございませんけれど……』

と純子さんは決心がつかないやうだつた。
『制動手として參考になることですか？』
『はあ』
『それぢや何うぞ』
『兄さんには內證よ』
『はあ。承知しました』
『今お見えになつてゐる美千代さんつて方は母の弟の配偶の妹の長女でございます』
『すると何ういふ關係になりますか？』
『母の里の從姉妹達と從姉妹同志になつてゐます』
『成程』
『お氣づきになりましたでせうが、兄さんは美千代さんがお見えになると、何も彼も忘れてしまひます。もう容易に戻つて參りませんわ』
『はゝあ』
『美千代さんを美の女神のやうに渴仰していらつしやいますけれど、私、お母さんにお斷り申上げてありますの』
『成程』

と僕は覺えず頭を掻いた。美の女神として渴仰云々とあの繪ハガキに書いた覺えがある。
『姉も同感でございます。私、學校が御一緒でしたから、あの方の性格をよく存じてゐます』
『何か缺點があるんですか？』
『こゝ丈けのお話ですが、男の方との御交際が廣過ぎます。よく出てお歩きになりますわ。思ひもかけないところでお目にかゝりますの。お母さんも本當の身內なら少し注意して上げたいと仰有つてゐるくらゐでございます』
『社交家ですね』
『はあ。今にこゝへ見えますから、お分りになりませうが、餘り狎れ〳〵しくて、拜見してゐても、ハラ〳〵致します』
『兄さんと意氣投合するんですか？』
『誰とでもよ、男の方となら』
『はゝあ。コケットですね』
『そんな名稱が當て嵌まるかも知れません。十分間お話をすれば何んな男の方の魂でも奪へるんですつて。然ういふことを平氣で仰有いますの。迚も變な自信を持つていらつしやいますわ』
『大變な人ですな』
『何うぞ御警戒を願ひます』

『僕は大丈夫です』
『人格者でも三十分ぐらゐですつて』
『ハツハ、、』
『オホ、、、』
と純子さんは譁つたのだつた。僕は何となく明るいやうな心持がした。田舎育ちの木強漢、斯ういふ綺麗な人から冗談を言ひかけられるのは初めてだ。
『僕、今日はもう失敬する方が宜いかと思ひます』
『いゝえ。構ひませんのよ』
『しかしお客さまの多いところへ御迷惑でせう。何うせ又上るんですから』
『斯ういふ時に居合せて下さると、お手加減が分りますわ。美千代さんにも是非御紹介申上げますから』
『僕、そんな人にお目にかゝりたくありません』
『でも制動手として御参考になりますわ。特別にブレーキをかけて戴かなければならない問題でございますから』
『それぢや勇氣を鼓して踏み止まりませう』
『何うぞ』

『餘り長くなりましたから、もうお引き取り下さい』
『はあ』
『種々と有難うございました』
『何う致しまして。飛んだお饒舌りを申上げました』
『僕こそ失禮』
と僕は骨相學の本を開いた。純子さんが行つてしまふのは惜しいけれど、仕方がない。ヒョッと目を上げたら、純子さんは戸の握りに手をかけて振り返つたところだつた。占まつたと思つて、僕は頻りに頁を撥つた。
間もなく光岡君が戻つて來て、
『おい、忘れてゐたよ。ハツハ、、』
と高らかに笑つた。
『やあ』
『失敬した』
『忙しいんだらう？　邪魔かい？』
『それほどでもない』
『御挨拶だな』

『ハッハヽヽ』
『お蔭で大分讀んだよ』
と僕は取り繕つた。純子さんと話し續けてゐたと思はれたくない。
『骨相學なんかもう何うでも宜い』
『何故？』
『お客さんだ』
『又誰か見えたのかい？』
『いや、親戚の娘だ。今にこゝへ來る』
『それぢや僕は失敬しよう』
『構はないよ。紹介する。迚も明朗な佳人だぜ』
『ふうむ』
『人格者、タジタジになるなよ』
『大丈夫だ』
『明眸皓齒とでも言ふんだらうな、あんなのが。實際稀に見るシャンだぜ』
『能書が長いね』
『ダンスが巧いんだ』

と光岡君は踊る眞似をした。大分調子づいてゐる。
そこへ純子さんが洋裝の令嬢を案内して來た。光岡君が紹介してくれた。しかし美千代さんは、
『何うぞ宜しく』
と會釋した丈けで、もう僕の存在を認めない。
『お兄さま』
『何ですか？』
『いつも同じ繪ばかりね』
『この頃は餘り描かないんです』
『おやめになつて？』
『然うでもありませんけれど』
『私、描いて戴けません？　もう先からお約束よ』
『モデルに來て下さらなければ駄目です』
『來て上げるわ』
『一日や二日ぢや出來ませんよ』
『一週間？』
『少くとも、それぐらゐ坐つて戴かなければ』

『O・Kよ』
『いつから來て下さいますか？』
『明日からでも宜いわ。朝の中なら』
『朝は學校があります』
『あら？　學校つて柄？』
『この頃は勉强してゐます』
『珍らしいのね。道理でお天氣が惡いと思つたわ』
『信用がありませんな』
『でも、私、お兄さんのやうなスポーツマンが好きよ。ゴルフにいらつしやる？』
『これも休業の形です』
『駄目ね。私、今度つれて行つて戴かうと思つてゐたのに』
『春になつたら一遍お供致しませう』
『お約束よ』
『はあ』
『繪を描いて戴くには、いつ上れば宜いの？』
『然うですね。もう直ぐ冬休みですから』

『それぢやこれもお約束よ』
『承知しました』
『ポーズは私の方から註文をつけてよ』
『結構です』
と光岡君は御機嫌取りの一方だ。不見識な男だと思ふと同時に、僕は美千代さんの無遠慮な態度が小癪に障つた。
『純子さん』
『はあ』
『少しお話しなさいよ、私にばかりお饒舌りをさせて』
『際がないんですわ』
『あらまあ！』
『オホ、、、』
『寸鐵的ね、純子さんは、いつでも』
『そんなことありませんけれど』
『何か面白いことあつて？』
『さあ、私、餘り出ませんから』

『引つ込み思案ね。些つとお遊びにいらつしやいよ。私、隨分貧しになつてゐますわ』
『濟みません。その中にお返し致しませう』
『然う〳〵、草間さんが宅の近所へ越してお出になりましたよ。新家庭よ』
『まあ〳〵』
『お嬶さんは迚も丈の高い人よ。草間さんはあの通りのチツポケでせう。好い對照よ。私、道で行き合ひましたの。迚も不調和だと思つてゐたら、草間さんぢやありませんか?』
『吃驚なすつたでせう?』
『えゝ。これは〳〵つて次第よ。今度二人で同ひませう、新家庭探檢に』
『お供致しませう。でも、ひどいわね。御結婚なすつて、知らん顏をしていらつしやるんですもの』
『私もそれを言つて上げましたの』
『何てお家? 私、お手紙で苦情を言つて上げますわ』
『さあ。何とか言ひましたよ』
『何うせ何とか仰有るお名前でせう』
『家丈けは知つてゐるんですけれど』
『呑氣ね、あなたも』
『確かに聞いたんですけれど、さあ、困つた。草間さんぢやありませんわね、もうお嫁にお出になつ

たんですから』
『ハッハ、、』
と光岡君が手を拍つて笑つた。
美千代さんは又光岡君を相手にして甘えながら、卓子の上の書物を擴げた。
『あら! 解剖? 怪しげなものね、これ』
『骨相學ですよ』
『道理で頭ばかりだわ。何あんだ? 詰まらない』
と相變らず粗野な言葉遣ひをする。
『面白いんですよ』
『人相が分りますの?』
『機能の發達が分ります』
『あの方、骨相學者?』
『僕ですよ』
『それぢや、私、見て戴けない?』
『お安い御用です。こゝへいらつしやい』
と光岡君は好い幸ひだつた。

『何うなさるの？』
『お頭を拜借』
『何うぞ澤山お使ひ下さい。オホヽ』
と美千代さんは椅子を寄せて行つて、光岡君に頭を委ねた。
『少しお凸ですね』
『あら！』
『お凸は人間性や慈愛性の發達してゐる證據です』
『痛いわ、毛を引つ張つちゃ』
『失禮々々』
『そこは何？』
『自尊性です。大いに發達してゐますよ』
『美人性つてものはない？』
『ありません。知識獲得性、こゝは駄目ですね。名前を聞いても忘れてしまふ』
『ひどいわ』
『本當です。しかし案外各機能の均等が取れてゐますよ、先づもつて申分のない頭です』
『ありがとうすわ、申分が』

『何處か惡いと思ふところがあるんですか？』
『そこに禿があるでせう？』
『さあ』
『その邊よ』
『ありませんよ』
『痛い』
『失禮』
『ある筈よ。探して御覽なさい。懸賞よ』
『禿なんかのある頭ぢやありません』
『でも、子供の時井戸へ落ちて打つたことがあるんですから』
『本當ですか？』
『以來頭が一人前ぢやありませんの』
『……』
『痛い！　痛いわ！』
『馬鹿！』
と一喝して、光岡君は美千代さんの頭を突き退けた。

『まあ！』
『兄さん、何うなすつたのよ？』
と純子さんは進み寄つて、美千代さを掩ふやうにした。
『卓爾さん』
『何だ？』
『覺えていらつしやいよ。私を誘惑しようとしたことを新聞に出して上げますから。イーンだ』
と美千代さんは憎面をして行つてしまつた。純子さんが後を追つた。
『君、何うしたんだい？　一體』
と僕は咎めるやうに訊いた。
『彼奴、增長してゐる』
『君がさせたんだ』
『生意義に僕の頭が惡いと言やがつた』
『それで憤慨したのか？』
『うむ。毛を引つ張つてやつた』
『矛盾してゐるね、君は。今日は頭が惡いといふ主張を骨相學で證明する爲めに僕を引つ張つて來たんぢやないか？』

『違ふ』
『何う違ふ？』
『僕は頭が惡くても、普通の馬鹿ぢやない積りだ』
『大馬鹿かい？』
『ツケ〳〵物を言ふ奴だな』
と光岡君は恨めしさうに僕を睨んだ。

天下の大勢

僕は光岡君のところへ行くばかりでなく、光岡君にも此方の下宿へ遊びに來て貰ふことにした。對等といふ條件が感化を及ぼす上に必要だと思つたのである。しかし學校からは此方の下宿が道順なのにも拘らず、僕は光岡君の家へ餘計引つ張られた。勿論、善導係を引受けた昨今は多少人格者をもつて自ら任じてゐるから純子さんが何うのといふことはないけれど、明るい世界は矢張り居心が好い。
『君、冬休みは何うする？　鄕里へ歸るのかい？』
と光岡君が訊いた。
『さあ』

『此方にゐろよ、決心をつけて』
『東京のお正月をなさるんぢやございませんでしたの？』
と純子さんも先頃から問題にしてゐた。僕は東京の正月は初めてだから興味があると話の中に言つて置いたのだつた。
『はあ』
『此方かい？』
と光岡君は期待してゐる。
『籠城つてことに略肚を極めた』
『勉強するのかい？』
『うむ』
『御挨拶だね』
『何故？』
『勉強するのかと訊かれると、大抵言葉を濁すものだけれど、君は愛嬌がない』
『それぢや何と言へば宜いんだい？』
『いや、駄目だよ。と斯う謙遜するのが當り前だらう』
『成程』

『言つて見給へ』
『いや、駄目だよ』
『もつと輕く。そんなに威張つて言つたんぢや、一向駄目らしくない』
『駄目だよ、迚も。と斯うかい？』
と僕は念を入れた。
『その調子、その調子』
『詰まらない。ハツハヽヽ』
『オホヽヽ』
と純子さんも共鳴してくれた。
『休暇中に勉強つてことは無理だよ。何うだい？』
『何が？』
『僕と一緒にスキーへ行かないか？』
『厭だよ』
『愛嬌がないね』
『僕はスキーや山登りには反對だ。あれは變裝した親不孝だと思つてゐる』
『危いからかい？』

『それもあるし、金がかゝる。親の脛を齧つてゐるものゝやることぢやない』
『君は極端だよ』
『いや。試しに百貨店へ行つて、親不孝道具は何處にあると訊いて見給へ。店員は直ぐにスキーや山登りの道具の賣場を教へてくれる』
と言つて、僕は純子さんの顏を見た。感心して貰へるだらうと思つたのである。
『君はそんなことを言ふから、親父と話が合ふんだね。僕よりも若いくせに、氣の毒ながら、二三十年後れてゐる』
『これで丁度好いんだらう。君と同じことだつたら、制動手の役が勤まらない』
『親不孝道具は奇拔でございますわね』
と純子さんが果して認めてくれた。
『無用の長物ですよ』
『長物ね、殊にスキーは。オホ、、ホ』
『僕、劣へたんですが、本當に必要な品物ほど、使はない時邪魔になりません。小ぢんまりして、氣の利いた恰好をしてゐます。例へば金槌や釘拔です』
『面白い御觀察でございますわね』
『おい〳〵、純子や、稻垣君を煽てちやいけない。この子は模範生だから、褒めると幾らでも藝をす

る』
『まあ。オホ、、、』
『お前はもう宜いよ』
『何故？　邪魔？』
『うむ。模範生と並んでゐると、何うしたつて見劣りがするから、お前は自然兄貴を侮るやうになる』
『大丈夫よ。これはこれ丈けの人つて、割引をしてかゝりますから』
『然ういふ奴だもの』
と光岡君は純子さんが特別氣に入りだ。
『オホ、、、』
『君、有要なものほど容積が小さいといふ原則は何うだらう？』
と僕は藝でもないが、純子さんの前では輝きたい。
『飛行船があるよ』
『成程』
『それから太陽』
『自然物は別だ』

『スキーが駄目なら鐵砲は何うだい？』
『あれも長物だね』
『いや、銃獵だよ。君はやらないかい？』
『やらない』
『しかし危險がないから宜いだらう？』
『此方になくても、鳥にある』
『それは當り前だ。鳥が目的だもの』
『商賣なら兎に角、僕は銃獵家の物々しい出立を見ると、もつと他に何か退屈の凌ぎやうがありさうなものだと思ふ。單に娯樂の爲めに生物の命を奪ふつてことは何んなものだらう？』
『おい。好い加減にしろよ』
『何だい？』
『考へ方が曲つてゐる』
『そんなこともない積りだけれど』
『いや、爲めにするところがある。僕はこれで人の心持が直ぐに分る。胸に手を當てゝ、よく考へて見給へ』
『それはアベコベだ。意見をする方で言ふ文句だ』

『白狀したね』
『何を？』
『君は僕に意見をする氣だらう？』
『さあ』
『此方は場數を踏んでゐるから、大抵分るんだ。意見をする氣の奴は妙に話を道德的に曲げてかゝる』
『參つたな、これは』
と僕は頭を掻いた。
『この間の美千代さんの口かい？』
『あれもある』
『それから？』
『腰を折られちや張合がないから又今度にするけれど、一つ言つて置かう』
『何だい？』
『僕達はやらなくても宜いことをやつて、やらなくちやならないことをやらないでゐる。年の改まるのを切つかけに、お互に少し考へ直す必要がある』
『うむ』

『然ういふ原則にして置いて、ソロソロ試驗の支度だ。休みに少し勉强しようぢやないか』
『まだ早いよ。實感が起らない』
『しかし僕は大學は初めてだから』
『變なことを言ふなよ』
『君は試驗勉强が利く方かい？』
『利き過ぎて困るんだ』
『と言ふのは？』
『前の晩にならないと駄目だ』
『それぢやそれまでやらないのかい？』
『うむ。しかし受けて失策つたことはない。最少限度の勉强でやつて行く名人だから、丁度君の忠告に當て嵌まつてゐる。やらなくちやならないことは餘りやらない代りに、やらなくても宜いことには骨身を吝まない』
『力瘤の入れどころが違つてゐるんだよ』
『なまじ餘裕のあるのが好し惡しだね』
と光岡君は四年後れてゐることを悉皆忘れてゐる。
『スポーツはスポーツ、御勉强は御勉强。と兩立させれば宜しいんでございませう？』

と純子さんが折衷說を出した。
『はあ』
『簡單ですわ。ノートを抱へてスキーにいらつしやるのよ』
『それも一つの方法でせう』
『稻垣先生は、あら、オホ、、、』
『ハツハ、、』
『稻垣さんはスキー本當にお嫌ひ？』
『元來なら好きいな次第ですけれど』
『まあ、洒落？』
『ハツハ、、』
『食はず嫌ひぢやございません？』
『主義として、あゝいふ大袈裟な運動は好みません。一體この頃の人はやらなくとも宜いことをやり過ぎますよ』
『親不孝？』
『はあ。若いものばかりに限りません。僕はゴルフも嫌ひです』
『まあ〳〵』

『西洋人の眞似ですから氣に入りません。好い年寄が若い柄の服を着て、オツチヨコチヨイ然と構へてゐるところを見ると、叩き踏してやりたくなります』

『大變ね。父もやりますのよ』

『はゝあ』

『稻垣君はお父さんよりも後れてゐるのらしい。コチ〳〵だ。勸誘しても駄目だよ』

と光岡君は諦めた。

『惜しいわれ』

『純子さんはスキーをおやりですか？』

『はあ。親不孝よ』

『程度問題ですけれど』

『稻垣さんも屹度お出下さると思つて書き入れにしてゐましたの。悉皆當てが外れてしまひましたわ』

『はゝあ』

『面白いのよ。いらつしやいません？』

『さあ』

と僕は今更豹變することも出來ない。スキーは親不孝で通した。人格者は辛い。

しかし光岡君を刺戟して、暮の中に來春の段取を定めたのは一成功だつた。光岡君は押し詰まつてから僕の下宿へやつて來て、

『豪いな、君は矢つ張り。言行一致だ』

と感心した。僕はノートの整理に沒頭してゐたのである。

『君に相談がある。今日は行かうかと思つてゐたところだ』

『何だい？』

『進行係だか制動手だか知らないが、兎に角、僕は妙な責任を負はされてゐる。君もそれは承知だらうね？』

『うむ。迷惑かい？』

『何かの因緣だと思つて苦情もないけれど、君が或程度まで僕の言ふことを聽いてくれないと、僕は動きが取れない』

『それは分つてゐる。僕は冗談に君と議論をするけれど、本氣ぢや決して逆はない？』

『然うかね？』

『少くともその積りだ。何かあるのかい？　氣に入らないことでも』

『いや、意見ぢやない』

『意見の口調ぢやないと思つた。悃願だらう？』

『何うも君は察しが早いよ』
『場數を踏んでゐるからね。ハツハヽヽ』
『僕は何も註文をつけない代りに、お願ひがあるんだ。僕の取る試驗は君も皆取つてくれ給へ』
『よし』
『君の取る試驗は僕も皆取る』
『然うすると、二人前かい？』
『いや、それをこれから相談するんだ』
と僕は光岡君を取つ捉へた。二人前かと言つて直ぐに負擔を感じる光岡君だ。有らゆることに趣味を持つてゐながら、學業丈けを好まない。僕は指導役を引受けた以上、一緒に及第して貰ふのが何よりの急務だと思つたのである。
『よし／＼。君の取るものを僕も取る』
『君は自分でこれつてものはないのかい』
『ない』
『それぢや僕の取る通りに取るのかい？』
『うむ。その方が早分りで宜い』
『呑氣だね』

『考へる丈け餘計だよ。何うせ一遍は皆取るんだから』
と光岡君はこの通りだ。
『大きいな、一寸』
『何が？』
『取る科目を人委せつてのは大きいよ』
『面倒だからさ』
『大人物の趣きがある』
『つまり僕は大人物が怪我をしたのさ』
『何ういふ意味だい？』
『井戸の一件さ。頭の發育が不均等になつてゐるけれど、普通の馬鹿とは違ふ』
『始まつたね』
『ハツハヽヽ』
『成程。主張する丈けのことはあるよ』
『大賢は愚なるが如しといふから、一寸變なところもあるだらう？』
『これは驚いた。ハツハヽヽ』
『それだから頭が惡いなんて言へば承知しない』

『大賢の出來損ひだよ、屹度』
と僕は煽てゝ置いた。
『ところで何うだい？僕達は明日立つ』
『御苦勞だね』
『來ないか？　見學丈けでも宜い』
『さあ』
『純子がもう一遍勸誘してくれと言ふものだから、やつて來たら、學校の方を取つ捉まつてしまつた』
『僕は失敬する』
『一日か二日何うだい？　厭になつたら歸れば宜いんだから』
『僕は寒さが嫌ひ、雪が嫌ひだ。その上、山坂が嫌ひだから、行つたところで迷惑するばかりだ』
『愛嬌がないんだね』
と光岡君はそれでもう見放した。
僕は翌日、光岡君と純子さんを上野驛に見送つた。若し再び勸誘を受けたら、應じる積りで支度をして行つたのだが、光岡君は同伴の青年に僕を紹介して、
『この先生の意見によると、スキーをやるものは親不孝ださうだ』

と言つた。
『はゝあ』
『この汽車は親不孝列車だらう』
『ハツハ、、、』
『迚も嚴しいのよ、稻垣さんは』
と純子さんも推奬の積りだつた。これでは說を變へる餘地がない。青年は親戚だつた。純子さんはケンさんと呼んでゐた。堅さんか賢さんか分らないが、極く親しい間柄らしかつた。僕は見送りを終つて歸る途中、少し落膽した。ソモ〳〵スキーを親不孝と斷定したのが間違ひの因だと思つた。以來動きが取れない。言責を重んじて、有望な機會を逸してしまつた。世の中には操觚者といふものがあるが、あの邊は始終獨創の意見を立てるから、隨分不便を感じることが多からうとシミ〴〵同情した。
年が改まつて、學校が又始まつた。僕は光岡君の誘導に心掛けた。感化を與へることは出來ないけれど、卒業まで手綱を弛めずに引つ張つて行けば宜い。それが關の山だ。光岡君にも然う斷つてある。しかしお父さんお母さんの期待が大きい。僕を餘程の人格者だと思つてゐる。純子さんはその邊がハツキリしないけれど、僕に暗示を與へて、制動手の役を勤め易くさせてくれる。
『稻垣さん、この頃又妖魔が見えますのよ』
『美千代さんですか？』

『はあ、油斷がなりませんのよ』
『氣をつけます』
『父が……』
『はあ！』
『オホ、、、』
と笑つて誤魔化す時は光岡君が聞える範圍へ來てゐる。甚だ機敏だ。光岡君は大賢をもつて任じてゐるから、一見愚の風格があつて、僕達が內證話をしても知らないでゐる。
或日、僕は光岡君の家の玄關でケンさんにパッタリ顏を合せた。
『やあ』
とケンさんは僕を覺えてゐてくれた。僕も好意を示したけれど、同時に直觀が働いた。此奴、油斷がならないと思つた。實は上野で會つた時から厭だつた。あれきり姿を消したから安心してゐたら、突如鼻の先へ現はれたのである。二人は一緒に光岡君の書齋兼畫室へ通された。
『やあ。珍らしい取り合せだね』
と光岡君が迎へた。
『玄關でお目にかゝつたんだよ』
と僕は分り切つたことを說明した。

ケンさんは僕が席についても、立つたまゝだつた。純子さんの油繪を凝つと眺めてゐる。
『卓爾君、君はこの方も腕を上げたね』
『さあ』
『巧いものだな、これは』
『驚いたかい？』
『うむ。これなら帝展へ通るよ』
『そんな標準は二三年前だよ』
『大きく出たね』
『ハツハ、、、』
『傑作だよ、これは』
僕は初めて訪れた時光岡君から聞いた話を思ひ出した。それによると、妹さんを貰ひたい奴は先づ妹さんの肖像畫を褒めてかゝる。ケンさんは正にそれだつた。
『稻垣君、ケンさんは去年法科を出て、家の會社に勤めてゐるんだよ』
と光岡君が紹介した。ケンさんは肩書つきの名刺を出して、
『何分宜しく』
と改まつた。

『何うぞ』
と僕はもうこの間で淨んだ積りだつた。それに名刺を持つてゐない。
『稲垣君は僕の制動手だよ』
と光岡君はブレーキを廻す手眞似をした。
『何？』
『制動手。これだよ。ハッハ、、』
『成程。ハッハ、、』
『秀才だよ』
『無論然うだらう。秀才でなければ勤まらない役目だ。稲垣君、敬意を表します』
とケンさんは愛想が好い。
『稲垣君、ケンさんも秀才だよ』
『敬意を表します。相原君』
と僕も輕く出た。相原賢之助といふのだつた。少くとも親が鈍物と見越しをつけた名前ではない。
『この二人は屹度話が合ふ。ケンさん、今日はゆつくりして行き給へ』
と光岡君は矢張り大賢を免れない。
『有難う何か用があつて來たのかい？』

『いや、あれから悉皆御無沙汰してゐるから』
『僕も失敬しちやつたよ』
『眞正面だな、こゝは』
『何が？』
『純子さんの油繪さ。巧いよ、矢つ張り』
『褒めても、おごらないぜ』
『いや、駈引なしの藝術本位だ。繪を見て思ひ出したと言つちや濟まないが、僕は未だ純子さんにも伯母さんにも御挨拶をしてゐないから、一寸失敬させて貰ふ』
と斷つて、相原君は立つて行つた。
『ナカ〳〵才物らしい人だね』
と僕は直ぐ探りを入れた。人格者として鷹揚に構へてゐたいのだけれど、つい氣が急いたのである。
『親父の氣に入りだよ』
『何ういふ親類だい？』
『さあ。美千代さんの親類だから、親類の親類の親類だらう』
『遠いんだね』
『僕のところは親類が無暗に多いんだよ』

『煩さいだらう』
『うむ。それだから待遇が定めてある。ケンさんあたりは上の部だ。しかし親父が可愛がり過ぎるものだから、少し野心を起した』
『何ういふ野心を？』
『純子を貰ひたいのらしい』
『ふうむ』
『油繪を褒めたらう？』
『うむ』
『僕は人の心持が直ぐに分るんだ』
『丁度好いぢやないか？　才子と佳人だ』
『くれてやらうか？』
と光岡君も駈引だ。心持が直ぐに分ると言つてゐるから危い。
僕は間もなく安心立命の境地を開拓した。それは相原君が純子さんを貰はうが貰ふまいが、此方の知つたことでないといふ結論だつた。尤もその裏打ちには、純子さんの僕に對する態度があつた。
『同じ友達にも二種類ありますわね』
と純子さんが僕に言つたのである。

『好いのと惡いのですか？』
『はあ』
『僕なんかは何方でせう？』
と僕は早速批判を求めた。
『兄に取つては光のお友達よ』
『光といふと好い方ですね』
『さあ。何うでございませうか？』
『おや〳〵』
『狡いわ。人格者をもつて任じていらつしやりながら、お訊きになるんですもの』
『人格者ぢやありませんよ』
『兎に角、妖魔から遠退かせて下さるんですから、暗雲でなくて光明ですわ』
『妖魔は矢つ張り參りますか？』
『はあ』
『僕、あれから會ひません』
『夜分よ、大抵度胸が好いんですね。夜分獨り歩きをなさるんですか？』
『お供つてものがありませう』

『成程』
『あなたが御存じの方よ』
『誰ですか？』
『賢之助、相原』
『はゝあ』
『あれ手先よ、妖魔の』
『これは驚きました』
『スキーへ行つて、後から電報で呼んだのよ、兄にも私にも無斷で』
『美千代さんをですか？』
『はあ。私、骨相學問題でお憤りになつたのを好い幸ひにしてゐましたら、以來又撚りが戻つてしまひましたわ』
『道理で』
『何あに？』
『五色から藏いた寄せ書に美といふ署名がありました。僕、誰だらうと思つて、疑問にしてゐたんです』
『ケンさんは迚も策士よ』

『然うらしいですな』
『美千代さんと兄を仲よしにして置けば、何でも自由自在だと思つてゐるんですわ』
『光岡君は一體何ういふ御意向ですか？』
『美千代さんのこと？』
『はあ』
『妖魔とは思つていらつしやいませんわ』
『僕、一つ言つて置きます』
『何うぞ』
『ケンさんといふ人物については何う思つていらつしやるんでせう？』
『信用していらつしやらないやうよ、本當のところは』
『然うでせうかな？』
『お父さんが可愛がり過ぎるから增長してゐると申してゐました』
『光岡君は悪い癖ですよ』
『何故でございませうか？』
『先入觀念に支配されて、初めから曲つた見方をします。僕は二度しかお目にかゝりませんが、相原君あたりなら立派なものですよ。青年紳士の模範です』

『まあ〳〵、御愛員ね』
『妖魔の手先なんて、可哀さうです』
と僕はケンさんの爲めに辯解してやつた。人格者ぶる次第でもないが、相手は信用がないから安心だ。
光岡君は繪を描き始めると一生懸命だ。僕と純子さんを畳室に殘して、ベランダへ出てゐる。時折、硝子越しに振り向いて、
『おい。何か面白い話があるのかい？』
と訊く。ナカ〳〵聞えない。
『妖魔のお話よ』
『え？』
『妖魔さん！』
『分らない』
『此方へいらつしやいよ。お寒いでせう』
『もう少し』
と辛抱が好い。
『光岡君、僕はもう歸るよ』

と僕も然う〳〵純子さんとばかり話をして滿足してゐるやうに思はれたくない。
『待てよ』
『君はやり始めると熱心だな』
『やらなくても宜いことだからさ』
『やらなければならない方をその調子でやつて貰ひたい』
『何とか言つて、この繪を註文したのは君ぢやないか？』
『純子さんだよ』
『二人だよ。繪を描いたり話の相手をしたりは無理だ。もう少し待つ責任がある』
と光岡君はこの邊、ナカ〳〵の好人物だ。純子さんと僕から島流しを食つてゐるのに氣がつかない。
『兄さん、麹町の姉さんよ』
と純子さんが取次いだ。
『構はん』
『御挨拶をしていらつしやいますよ』
『やあ。今日は』
と光岡君は頷いた丈けで、如何にも忙しさうに畫筆を動かし續けた。僕は麹町の姉さんには三四度

お目にかゝつて、光岡君とこの姉さんのお婿さんとの經緯を苦に病んでゐる。
『稲垣さん』
『はあ』
『あれが教育を受けた人間の姉に對する態度でございませうか？』
と姉さんは光岡君が受けつけないものだから、僕を相手にした。
『さあ』
『呆れたものですわね。今日はですつて。八百屋の御用聞きと同じことよ』
『さあ』
『私が斯うしてお百度を踏んでも、あやまりませんの。何か御分別はございませんの？』
『さあ』
『厭ね、稲垣さんは』
『何ですか？』
『卓爾の味方よ。何を申上げても、御迷惑さうな御返辭ばかりなさるんですもの』
『ハッハ、、、』
『私、無理でございませうか？』
『いや、卓爾君が惡いでせう』

『でせうつてのは疑問のお言葉でせう？』
『惡いんです』
『實は私、主人と二人で稲垣さんのところへ伺つて、御相談申上げたいと思つてゐますの』
『はゝあ』
『御迷惑？』
『いや、一向』
『私、譲歩しますわ。仲さへ直せば、あやまらなくても堪忍して上げますわ』
『去年の正月からと承はつてゐますから、丁度一年になる勘定ですね』
と僕は殊更落ちつき拂つてゐる。
『はあ』
『何方も何方です』
『卓爾と同じに扱はれたんぢや私達迷惑致しますわ』
『しかし喧嘩ですからね。兩方で角を折るんです』
『それは先方から折つて來れば、私達だつて折らないことはありませんけれど』
『然う仰有つてゐたんぢや果しがありませんから、これは矢つ張りあなた方の方から唯一言……』
『一言、何う申しますの？』

『悪かつたつてことを』
『まあ』
『それが一番早分りです』
『でも、兄よ、主人は。姉よ、私は。兄が弟に意見をして、組みつかれたんですわ。それで兄の方からあやまりますの？』
『理窟は兎に角、その方が早いと思ふんです』
『早くても晩くても厭ですわ。弟にあやまることたんか』
と姉さんは無論妥協の餘地がない。
『困りましたな』
『私、お父さんお母さんが御心配さへなさらなければ、あんな分らず屋の弟と仲直りなんかしなくても宜いんですけれど』
『姉さん、聞えますよ』
と純子さんが注意した。
『憎らしいつてありはしませんわ』
『今に何うにかなりませう』
『私、自分丈けなら何うでも宜いんですけれど、お前の縁談がありますからね』

『……』
『でも、口惜しいわ、今更折れるのは』
『悪かつたと仲有れば、卓爾君も屹度悪かつたと仲有るでせう。結局五分五分です』
と僕はその程度なら仲裁が出來る積りだつた。
『あなた、保證して下さる？』
『それほどまで分らない卓爾君ぢやありますまい』
『五分五分なら、仲直りをしますわ。兎に角、惣領ですからね。卓爾がお冠を曲げてゐますと、私達、純子の縁談を持ち出すことが出來ません』
『成程』
『三つも四つもあるんでございますけれど』
『姉さん』
と純子さんが制した。
僕は和解を頼まれたと同じやうに感じた。現に當事者同志が部屋の内と外に控へてゐる。光岡君の善導係としては默つて見てゐられない立場だつた。此方を信用してゐる光岡君がまさか赤恥もかゝせまい。
『光岡君』

と僕はベランダへ進み出た。
『何だい？』
『姉さんが君と握手をして笑ひたいと言ふんだよ』
『……』
『文句はあるまい？　來給へ』
『卓爾さん！』
と姉さんはもう側に來てゐた。僕は二人の手を握り合はさせた。
『姉さん、堪忍して下さい』
『宜いのよ、もう』
『その代り、兄貴も堪忍して上げます』
『まあ』
『これで五分五分でせう』
と光岡君は内證話を聽いてゐたのらしかつた。この和解は僕の手柄でも何でもない。もう時機が來てゐたのである。光岡君も然ういつまでも旋毛を曲げる氣はなかつたが、以來姉さんが顏を合せる毎に食つてかゝるから、辛抱較べをしてゐたのだと言ひた。
『姉さんも姉さんよ』

と純子さんは寧ろ光岡君に同情してゐた。
『何故ですか？』
『毎週のやうにお出になつて、「卓爾さん、おあやまりなさいよ、さあ」と仰有るんですから、兄さんだつて意地になつたんですわ』
『雅量のない人が揃つてゐるんですね』
『でも麹町の兄さん丈けは違つてゐますわ』
『これは豪いんですか？』
『雅量綽々よ。姉の言ひなりですから』
『ハツハ、、、』
『オホ、、、』
『兎に角、宜かつたですな』
『お蔭さまで』
『いや、一向』
『私、これからは麹町へも大手を振つて行かれますわ』
『結構ですな』
と僕は祝して置いた。

しかし斯うなると人格者も氣が揉める。ケンさんは恐るゝに足らないとしても、緣談が然う澤山あつては油斷がならない。頭丈けの競爭なら大抵負けない積りだが、情けないことに、此方は未成品だ。卒業までは相手にして貰へない。卒業しても勤め口があるか何うか分らないと思ふと、既成品が益々怖い。緣談といふのは皆既成品だ。太刀打ちが出來ない。斯ういふことなら、麹町の緣談を引き受けるのだつた。今までは堰があつた。そこに[illegible]めに、もう少時和解をさせないで置くと宜かつたと思つた。しかし前後の考へもなく堰を切つてしまつた。綺麗な魚は逃げて行くかも知れない。譬へまで考へて後悔したけれど、光岡君の兩親は深く僕を德としてくれた。

『稻垣さん、明日の晩、私、暇がありますから、一寸伺ひます。宜いですか？　この上とも打ち合せて置きたいことがあります』

とお父さんが光岡君には內證で申入れたのは、それから間もないことだつた。

その當日、大阪の兄が偶然上京した。僕が學校から歸つたら、下宿に着いてゐた。出張でやつて來たのだつた。兄貴は一體獨り好がりだ。學生時代にもその傾向があつたが、もう卒業して萬事順調に行つてゐるから、大いに兄貴ぶる。會社の信用を一人で背負つてゐるやうな話をして、

『矢つ張り好い人間と附き合はなければ駄目だ。友達が悪いと、何うしても眤まれる。會社へ入つて眤まれたら、もうお仕舞ひだ。おれなんかこれでナカ〳〵要領を好くやつてゐるんだよ。同じに入つたものが十何人あるけれど、東京出張はおればかりだ』

と處世訓を與へた後、思ひ出したやうに、

『ところで、小三、光岡は何うしたんだい？　あれから一向何とも言つて寄越さないところを見ると、お前、交際してゐるんぢやないか？』

と訊いた。

『はあ』

『何うだ？』

『してゐます』

『いけないよ』

『しかし光岡君もこの頃は勉强してゐます。極く眞面目です』

『何うだかね。眞面目なら、もう疾うに卒業してゐる筈だ』

『僕の感化を受けて急に引き締まつたんです』

『そんなことを言つてゐる中に、お前の方が感化を受けるんだ』

『大丈夫ですよ。人格で行きます』

と僕は自信がある。兄貴を驚かしてやる積りだつた。

『お前は何も知らないから、そんなことを言ふけれど、光岡は人格者の永井校長に進退伺ひを出させてゐる。素人の人格者が役に立つものか？　おれなんかも中學時代には隨分ひどい目に合つてゐる』

『光岡君も言つてゐましたよ。中學時代には群集心理の犠牲になつたんですつて』
『何方が犠牲だかね』
『兎に角、この頃は悉皆落ちついてゐます』
『悪い人間ぢやないけれど、桁が外れてゐるから困る。お前だつて餘りガツチリしてゐる方ぢやないんだから、人格で感化しようなんて思ふと、飛んだ間違だぜ。教室で口をきくぐらゐは構はないが、家へは誘はれても行かない方が宜いよ』
『しかし頼まれゝば仕方がないでせう？』
『頼むよ、彼奴は。誘惑が上手だもの。中學時代だつて、皆を家へ引つ張つて行つて、それから計畫するんだ。東山を焼かうの、公園の大砲へ火藥を詰めようのつて』
『ハツヽヽ』
『笑ひごとぢやないぜ』
『光岡君に頼まれたんぢやないです。光岡氏に頼まれたんです』
『光岡氏？　親父さんかい？』
『はあ。光岡氏が自身こゝへやつて來たんです』
『嘘をつけ』
『本當ですよ。卓爾があなたの人格の感化を受けて更生一新しましたから、この上とも何分宜しく御指導を願ひますつて、折り入つてのお頼みです』
『ハツヘヽヽ』
と笑つて、兄貴はもう相手にしなかつた。
『兄さんはこゝへ泊つても宜いんでせう？』
『その積りで直接やつて來たんだ。宿屋へ泊る差額丈け置いて行く』
『有難うございます』
『何か食ひたいものはないかい？』
『さあ』
『兎に角、晩は出掛けよう』
『今晩は差支へます』
『誰か來るのかい？』
『はあ。光岡氏が見える約束です』
『おれも久しぶりだ。會つても宜い』
『親父さんの方ですよ』
『おい。本當かい？』
『チョク〳〵來るんですよ』

『何しに？』
『相談に』
『大きなことを言ふな。光岡氏は會社を二つも三つも持つてゐる大立者だよ。こんな下宿屋へ來るものか？』
『兄さん。草廬三顧つてことが漢文にありますよ』
『まさかそんな關係でもあるまい』
『賭をしませう』
『宜いとも』
『若し光岡氏が見えたら、兄さんの出張旅費を悉皆貰ひますよ』
『おい。本當かい？』
『ハッハ、、、』
と僕は勝ち誇つた。
夕食後、話し込んでゐるところへ、女中が光岡氏を案内して來た。
『御來客中へ……』
と光岡氏は内證だから迷惑さうだつた。
『これは兄でございます』

『はゝあ』
『何うぞ此方へ。そこは端近でございますから、何うぞ此方へ』
と兄貴は頻りに恐縮した。僕も光岡君のお父さんには敬意を盡すけれど、兄貴は會社員だから又違ふ。社長に對する禮を執るから、下宿の六疊では甚だ覺束ない。何うぞ此方へと請じても、五十歩百歩の汚さだ。
光岡さんは寛ろいだ。兄貴が卓爾君と同級だつたといふことも好都合だつた。
『稲垣君のお蔭で卓爾は更生一新しましたが、未だ〳〵ドッコイ〳〵です』
『はゝあ』
『梶取が側についてないと矢張り危いんです』
『小三郎で間に合ふやうな御用ならば御遠慮なく仰せつけて戴きたいです』
『實は家内とも相談したんですが、宅の方へ來てゐて戴くことは叶ひませんでせうか？』
『お安い御用です』
『卓爾もその方が希望ですけれど、餘り御苦勞過ぎると言つて、自分では遠慮してゐます』
『小三郎の爲めにも好い修業になりませう。何分宜しくお願ひ申上げます』
『これも矢っ張り御緣でございますよ』
と二人は僕を其方退けにして取引を始めた。兄貴は何處までも社長本位だ。僕として多少意見もあ

るけれど、純子さんの面影が頻りに浮んだ。矢張り手近にゐる方が光岡君の監督も屆く次第だから、枉げて天下の大勢に委せる決心だつた。

大賢の出來損ひ

兄貴は光岡君のお父さんに會つて豹變した。主義も主張もない。會社員は皆斯うか知らと僕は首を傾げた。社長と名がつけば、無條件で崇め奉る。今まで光岡君とは餘り交際しないやうにとお說法をしてゐたのに、忽ちにして、僕を光岡家へ住み込ませることに納得してしまつた。弟の身柄は兄貴の自由になると思つてゐる。僕が單に自分の都合上默つてゐるとは氣がつかない。

『はあ。萬事僕から命じて置きます。決して違背は致させません』

『それではもうソロ〳〵試驗でせうから、お早い方が私も安心出來ます。稻垣さん、如何でせう？』

と光岡氏は流石に僕の意向を重んじてくれた。

『善は急げです。早速』

『有難うございます。しかし何う切つかけをつけますかな？　こゝで相談をしたことが知れると面白くありません』

『私が明日にも伺ひませう。久しぶりですから、お目にかゝりたいと思つてゐたところです』

と兄貴は何處までも便宜を計る。

『成程』

『その折、光岡君から屹度お話が出ませう。何なら、あなたからお切り出し下さつても結構です』

『あなたがお出下されば、纏まりが早いです。それでは御足勞ながら、然ういふことに願ひませうか？』

『お安い御用です』

『明晩といふことにして、お待ち申上げます』

『承知致しました』

『それでは何分宜しく。稻垣さん、毎度卓爾を瞞すやうですけれど、今晩はお目にかゝらなかつたことに何うぞ』

と光岡氏は相變らず念を使ふ。

僕は無論兄貴の顏を立てゝやる積りだつたが、同時に少し油を取つて置くのも、この際徒爾でないと思つた。上長に對する敬意は結構だが、餘りに頭が低い。士君子としては、もつと落ちつきが欲しい。僕の家は昔から漢學で相應名高い。兄貴は學校の成績も好かつたし、才氣もあるけれど、人格的の重みに乏しい。目端が利き過ぎて、器の小さゝを感じさせる。そこへ行くと、矢つ張り此方だ。一つこの邊を注意してやらうと考へてゐるところへ、

『おい。小三、何うだ？　おれの外交手腕は』

と兄貴は早速自慢を始めた。光岡氏を送り出すと直ぐ後だつた。
『何ですか？』
『光岡さんは好い印象を受けて歸つて行つた。お前は見學してゐて參考になつたらう？　あの呼吸を忘れちやいけない』
『臨分下げましたね？』
『何？』
『頭です。幾つお辭儀をしたでせう？』
『一々勘定はしなかつたが、相手は何分社長さまだ』
『しかし兄さんの方の會社の社長ぢやありませんね』
『何處の會社でも、社長といふ地位に變りはない。それは豪いものだよ。お前なんかは未だ社會へ出ないから分らないけれど』
『兎に角、僕は見てゐて、收支償はないと思ひました』
『それは先方は社長だもの、然う一々答禮をしない』
『いや、あんなにペコ〳〵しても得るところがありません。自分の會社の社長なら兎に角、些つとも關係がないんですから』
『敬意を表したのさ。軍人を御覽。大將に會へば、直接關係がなくても敬禮をする』

『成程』
『お前は未だ學生だから、サラリーマンの心理が分らないんだ』
『恐れ入りました。しかし餘所の社長にあれなら、自分の方の社長だつたら鯱鉾立ちでせうね？』
『いや、案外なものだよ。家の社長には一つ以上お辭儀をしたことがない』
『威張つてゐるんですね。敬意を表さないんですか？』
『いや、悲しい哉、下積みは敬意なんか表する切つかけがないんだ。廊下で偶然行き會ふぐらゐのものだし、社長は一々相手になつちや煩さいから天井を見てゐる』
『はゝあ』
『社長と直接話すのは重役さ』
『それぢや重役の前へ出ると、米搗きバツタをやるんですね』
『いや、平社員は重役とも交渉がない。食堂で遠くの方からお辭儀をしても、先方は大抵氣がつかないでゐる』
『心細いんですな。それぢや一體誰と口をきくんですか？　上の方では』
『課長さ』
『成程』
『これだつて叱られる時の外餘り交渉がない』

『同僚は多いでせう？』
『百人からゐる。しかし大抵故參だから、此方は頭が上らない』
『下はもうないんですか？　兄さんの下は』
『馬鹿にするなよ』
『あるんですか？』
『あるとも。年からいふと先輩でヨボ〳〵のがゐる。グツと若いのも多い。女もゐる』
『何て役だか當てゝ見せませうか？』
『うむ』
『小使に給仕に交換手』
『ハッハ、、。當てやがつた』
『頭が好いでせう？　ハッハ、、』
『本當の下積みさ。これが僞らざる告白だから、お土産なんか期待しちやいけない』
『何あんだ？』
『ハッハ、、。矢つ張り頭が好いだらう？』
『まさか弟の下宿へ來て食ひ倒して行く積りぢやありますまいね？』
『大丈夫だ。實費で置いて行く』

『先刻の賭は何うしてくれます？』
『何か買つてやらう』
『外套が欲しいんです。春外套が』
『二十圓で辛抱してくれ』
『二十圓ぢや買へないけれど、取れば取り徳です』
『ひどい奴だな』
『久しぶりで會つた弟に外套一枚買つてくれられない會社員ですから、社長と聞くと目を廻す道理ですよ』
『境遇上仕方がない。天邊とドン底だ』
『して見ると、僕は豪いものでせう？　その社長が頭を下げて僕のところへ相談に來るんですから』
『感心した。嘘だらうと思つたから賭をしたんだ』
『僕の人格を認めないから損をするんです。巧く行つた。屹度斯う來るだらうと見込をつけたんです』
『足許を見て賭をする人格者があるものか？』
『ハッハ、、』
『しかし驚いた。光岡さんは時々見えるのかい？』

『はあ。毎度と仰有つたでせう？』
と僕は威張つてやつた。
『お前は有望だ。おれよりも出世が早いよ』
『何故ですか？』
『光岡さんを捉へてゐるから、就職難つてことがない』
『ハツハ、、』
『何が可笑しい？』
『サラリーマンは矢つ張り違ひますね。何でも功利的に考へます』
『しかし實際問題として、おれの言ふことが今に分つて來る。光岡君と親しくして置けば、決して損はない』
『兄貴』
『何だ？　兄貴だなんて』
『先刻とは話が違ふぢやありませんか？　好い人間と附き合はなければ駄目だといふ御意見でした』
『親父さんが承知づくなら構はない。改めておれが許す。光岡君だつて決して悪い人間ぢやない』
『寧ろ善人ですよ』
『うむ。善人過ぎるから、焦てに乘つて調子づくのさ。その邊さへ氣をつければ間違ひない』

『この頃は昔と違つて、ナカ〳〵考へてゐます。決して無茶はやりません』
『それなら尚更のことだ。明日にも會つて、お前のことをよく頼んでやる』
『卓爾君にですか？』
『卓爾君にも光岡さんにもお母さんにもさ。總花政略だ』
『元來此方が頼まれてゐるんですから、然う下から出る必要はありませんよ』
『いや、兎に角、先方は鄕黨の大先輩で社長だ。お前がこれから世話になるとすれば、禮儀つてものがある。おれに委せて置け。悪いやうには計らはない』
『何うぞ宜しく』
『おれの外交手腕をよく見てゐてくれ。同じことなら、將來重役になれる保障を取つて置く』
と兄貴は無論僕の爲めを考へてくれるのだけれど、萬事功利的で話が露骨だから迷惑する。就職難は確かに青年の思想を險悪ならしめる。
僕は間もなく光岡君の家へ引き移つた。光岡君のお父さんは二度までも僕の下宿を訪れてくれた。矢張り就職難の今日、即ち人間があり餘つてゐる現在、大會社の社長が一介の書生にこれ丈け目をかけてくれるといふことは、よしそれが息子大切の爲めでも有難い。僕は感激した。もう一遍で草廬三顧になると思つてゐたところへ、兄貴が丁度好く出張で上京して、肝煎りをしてくれたのである。僕は光岡君の部屋の二階を當てがはれた。

『こゝ天井部屋よ。善導係の先生としては虐待ね、些つと』
と純子さんが笑つた。
『いや、僕が希望したんです。光岡君がギターを彈かない限り、こゝが一番靜かですから』
『それは本當ね』
『ピアノからも、一番遠距離です』
『あらまあ！』
『ハッハ、、』
『覺えていらつしやいよ』
『ピアノは冗談ですけれど、恐るべきはギターでせう』
と僕は純子さんの御機嫌を取つた。純子さんは光岡君同樣僕の引つ越しを喜んでくれたのである。
『何だつて？』
と光岡君が振り返つた。油繪を壁に懸ける爲めに椅子に乘つてゐた。
『君が彈かなければ、こゝが一番靜かだらうと言ふのさ』
『早速禁じてしまつたね』
『いや、君の藝術心に委せるのさ』
『これは敵はない』

『ハッハ、、』
『靜かなことゝ見晴らしの好いことがこの部屋の取柄だらう。天井部屋だげれど、友達を泊める積りで念入りに拵へて置いたら、丁度役に立つた』
『廣くて申分なしだよ。勉强が出來るだらう』
『一々意味があるんだね』
『いや、兄貴とは違ふ』
『ハッハ、、』
『兄貴は君にお說法をしたさうだね』
『うむ、ひどくやられた』
『獨り好がりで困るんだよ』
と僕は具合が惡かつた。
『稻垣さん、こゝは私の富士見室でしたのよ。お友達がお出になると、屹度こゝへ御案內申上げたんですけれど』
と純子さんが僕の注意を窓から外へ向けてくれた。
『成程。見えますね』
『はあ』

『お友達がお出になつた時は開放つてことに致しませう』
『いゝえ。それには及びませんのよ』
『こゝ丈けですか？　富士山の見える部屋は』
『洋間からも見えますけれど、銀杏の樹が邪魔をします。冬は宜いのよ。葉がありませんから。夏は駄目よ。蓊鬱として生ひ繁つてゐますから』
『蓊鬱としては好かつたね。これだよ』
と光岡君は今し持て餘してゐた油繪を指さした。成程、銀杏が描いてあつた。お手のもので材料豐富だから、それからそれと吊る。
『君、もう澤山だよ。展覽會のやうになつてしまふ』
『これ丈けにして置かう』
『大きいんだね、それは。何號つていふんだい？』
『感心してゐないで手傳つてくれよ』
『よし』
と僕は持ち上げた。純子さんも加勢に來た。大きいものだから、ナカ〳〵思ひ通りに行かない。光岡君は何回も吊り直した。僕達はその都度下から持ち上げた。僕は純子さんの顏を斯う近くに見るのは初めてだつた。睫毛の長い人だと思つた。一度努力の最中に視線が正面に行き合つても、お互に避

けることが出來なかつた。そんなに接觸してゐたのだつた。純子さんは眞赤になつてしまつた。しかし微笑んでくれた。僕は人格者としての意識を失はなかつたが、微笑み返すのを禮と感じた。油繪が完全に納まつた時、
『兄さん、もう宜いの？』
と純子さんが訊いた。僕はそれによつて純子さんが再三の努力を負擔に思つてゐなかつたと解釋した。
『君、これは僕の傑作だよ。好いだらう？』
と光岡君は油繪を見上げた。
『如何にも銀杏らしい。蓊鬱としてゐる』
『昔、この下に狸が棲んでゐたさうだ。下屋敷時代からの古木だからね』
『化け銀杏か？』
『うむ。しかし普通の狸と違つて、いたづらをしない。毎晩お坊さんに化けて說敎をして歩いたといふんだ』
『本當かい？』
『僕の家が越して來る前からの言ひ傳へだ。根つこのところに何か祀つてあるから、多少根據があるのかも知れない』

『面白いね。感心な狸だ』
と言ひながら、僕は机に手をかけて、彼方此方見廻した。置場を定めなければならない。
『こゝは何うだい？』
『何處？』
『銀杏の下さ』
『狸かい？』
『うむ人格狸』
『嚴しく來たね』
『ハツハヽヽ』
『オホヽヽヽ』
と純子さんが笑ひ出した。
『君、丁度好いよ、ここが』
と光岡君は机を引つ張つて行つた。
『然うだね』
『爭はれないものさ。矢つ張り銀杏の下が當て嵌まつてゐるんだ』
『初めからその積りでこゝへ吊つたんだらう』

『ハツハヽヽ』
『自分こそ狸だ』
『本當よ。これは兄さんのお部屋の方が宜いわ』
と純子さんは僕の味方についてくれた。
折から戸をコツ〳〵と叩くものがあつた。
『お入り』
と光岡君が應じた。戸が開いて、ケンさんの顏が覗き込んだ。
『狸々』
と僕は本能的に呟いて、純子さんの表情を見守つた。異存はないやうだつた。
『オホヽヽヽ』
と甲高い笑ひ聲が聞えて、美千代さんが續いた。
『妖魔よ』
と純子さんが囁いた。油斷なく行動を取るやうにといふ依頼だつた。しかし次の瞬間に、
『あらまあ、美千代さん、ようこそ』
と心の底からのやうに迎へた。これも一種の狸だと思つた。美千代さんは純子さんよりも光岡君だつた。光岡君も妖魔の顏を見ると、制動手の存在を忘れてしまふ。賢之助君は純子さん以外に目的が

ない。咄嗟の衝動は正直に告白する。僕は刹那的にそれ〳〵の屈託が分つた。

「やあ。やあ〳〵……この間は失禮」

と賢之助君は最後に僕の所へ寄つて來て如何にも嬉しさうに會釋をしたが、名前を忘れてゐた。

「稲垣さんよ」

と純子さんが敎へた。

「やあ。相原さん、御機嫌好う。今日は日曜ですから、或はお目にかゝれるかと思つてゐました」

と僕は頭の好いところを見せてやつた。二三週間前の日曜に會つたのだつた。しかし期待も何もしてゐない。

美千代さんは行儀が惡い。いきなり僕の机の上に腰をかけてしまつた。尤も荷物を持ち込んだばかりで、部屋の中が雜然としてゐた。書齋といふよりも、未だ物置に近かつた。

「お兄さま何うしたの？　このお部屋」

「稲垣君が越して來たんです」

「あらまあ！　あら〳〵」

と美千代さんは氣がついたやうに机から下りて、

「私、失禮しちやつたわ。稲垣さん、その後は」

と挨拶した。純子さんが椅子を薦めた。賢之助君が足りない分を隅の方から持つて來て、

「何うぞ皆さん」

と小腰を屈めた。

「濟みません。主人、一向氣が利かないものですから」

と僕は存在を主張した積りだつた。これからはこの部屋の主人として、この連中を操縱しなければならない。

「稲垣君、君は本當にこゝへ越してお出になつたんですか？」

「はあ」

「それぢや何分宜しく」

「僕こそ」

「一體何うなすつたんですか？」

「下宿を追つ拂はれたものですから」

「まさか」

「ハツハ、、、」

「御一緒に勉强が出來て、卓爾君も丁度好いでせう」

「居候ですから、何分宜しく」

「これからは度々お目にかゝりませう。僕は御承知の通り卓爾君と親しく願つてゐる上に、伯父さん

の會社に勤めてゐますから、二重三重の關係です」
と賢之助君も主張のやうだつた。
「純子さん」
と美千代さんはニヤ〳〵笑つた。
「何あに？」
「形勢が分つたわ、私」
「何の形勢？」
「稲垣さんはお兄さまの善良コーチね」
「さあ」
「人格者だつて評判ぢやございませんか？」
「そんなこと、私、存じませんわ」
「善良コーチよ。蓋し適任でせう」
「……」
「兼」
「はあ？」
「お兄さまの善良コーチ兼……」

「何あに？」
「オホ、、、」
「分りませんわ」
「折角何うぞ」
「まあ！　主觀的ね、相變らず」
と純子さんは相手にならない。
「美千代さん、善良コーチといふと、僕は不良かい？」
と光岡君は無論冗談だつた。
「でも善良つてことはないでせう？」
「おや〳〵」
「不良ばかりでもないわね」
「何方だい？」
「カツクテールよ、不良善良純不純の」
「成程。然うかも知れない」
「だから宜いでせう？」
「うむ。仕方がない」

「人間は大抵カツクテールだよ。稲垣君あたりは特別だらうけれど」
と賢之助君が言葉を挿んで、僕を見返つた。
「稲垣君は僕達とは少し違ふかも知れない」
「品行方正學術優等さ。取柄があればこそ、今回お召し出しにあづかつたんだらう」
「お願ひ申して來て蔵いたんだよ」
「伯父さんからも一寸聞いた」
「ふうむ。稲垣君のことをかい？」
「稲垣君つてことは今分つたんだけれど、專ら會社の評判だつた」
「何が？」
「君に太郎冠者がつくつてことさ」
「太郎冠者？」
「ハツハ、、。會社には頭の好い奴がゐるよ」
「何故？」
「主從一からげだもの。太郎冠者のつくのは必ず馬鹿大名だらう？」
「太郎冠者、ゐるかやいつて、あれね？　オホ、、、。私、お芝居で見たわ」
と美千代さんが打ち興じた。僕は何とも言へない厭な心持になつた。

「賢さん！」
と忽ち光岡君の聲が響いた。
「何だい？」
「丁度好い序だから、僕は稲垣君の立場を明かにして置く」
「宜いよ、君。分つてゐる」
「いや、誤解があるといけない。僕のところは今まで食客を隨分置いたけれど、稲垣君は違ふ。全然對等の友人だ。僕同樣に敬意を表してくれ給へ」
「無論僕もその積りだよ」
「それぢや太郎冠者とは何だ？　失敬ぢやないか？」
「君、憤つちや困る。僕は單に會社の評判を取次いだ丈けだ」
「その評判が誤解だよ」
「しかし僕の責任ぢやない」
「何て奴だい？　そんなことを言ひ出したのは」
「それは分らないよ。評判つてものは何處からとなく立つんだから」
と賢之助君も少し興奮して來た。
「兎に角、君丈けは誤解しないでくれ給へ。稲垣君は僕の足りないところを補つてくれる唯一無二の

親友だ。見てゐてくれ給へ。僕はこれから更生一新する」
「そんな必要もないだらう」
「何故？」
「今までだつて別に申分はないんだもの。しかし境遇が境遇だから、兎角人の口端にかゝるのさ。それを僕の責任にしちゃ困る」
「つい君に食つてかゝるやうな形になつて済まなかつた。君も知つてゐる通り、僕は缺點が多い。しかし巷間傳ふるが如き馬鹿息子ぢやない積りだ」
「君、もう宜いぢやないか？」
と僕は光岡君を遮つて、
「相原さん、済みません、僕の爲めに問題が起つて」
と二人の間を執り成した。
「いや、何でもないんですよ。僕がつい詰まらない評判を傳へたものですから」
「僕も何でもないんだ。しかし賢さん、今も言ふ通り、僕は短所缺點が多い。斯う直ぐ躍起になるのもその顯著な一つだ」
「然うお分りになつてゐれば結構さ」
「それが惡いんだよ、君は」

「又始まる」
「いや、もう言はない。しかし凹んでゐるのは高い、こころのある證明だらう？　短所といふのは長所があればこそだ」
「それは僕も認めるに吝かでない」
「本當かい？」
「少くとも巷間傳ふるが如きお坊つちやんぢやない」
「それを充分に認めてくれた第一最初の知己がこの稲垣君さ。子供の時から好い方は些つとも見て貰へなかつた僕だ。感激したよ。此奴なら、失敬々々、稲垣君からなら、僕は何を言はれても腹が立たない。實にツケ〳〵物を言ふ男だけれど、僕の全幅を認めてゐてくれるんだ。そこで僕も稲垣君を認めたんだ。僕の知己として改めて紹介する」
と光岡君はいつにもない熱烈な調子だつた。僕も斯う持ち上げられると、つい人格者といふ心境になる。光岡君とは實に妙な關係だ。善惡係に頼まれてゐながら、此方が却つて善惡を受ける。
「詰まらないわ」
と美千代さんが退屈して鼻を鳴らした。
「何故？」
と純子さんが受けた。

『直ぐ議論になるんですもの』
『こゝちや一向お構ひ出來ませんわね。階下へ參りませう』
『えゝ』
『兄さん、如何？』
『行かう』
『善良コーチの稲垣先生、はいちや』
と美千代さんが僕にお辭儀をした。馬鹿にしたのではない。敬意を諧謔化したのだ。
『はいちや』
と光岡君が眞似をした。純子さんも賢之助君も光岡君と美千代さんについて下りて行つた。僕は獨り殘つて、荷物の整理を始めた。
もう試驗が迫つてゐたから、ウカ〳〵してゐられなかつた。煎じ詰めたところ、僕は光岡君を拉して次の級へ進むのが任務の全般だ。人格で召し抱へられたのでも何でもない。單に都合だ。押してでも搾いてでも、上げてやらなければならない。これが吐はないやうなら、光岡氏から受けた信頼を裏切ることになる。
『宜いですかな？　大丈夫ですか？』
と光岡氏も心配して頻りに念を押した。奥さんは僕に委せて置けば間違ないと思つてゐるのか、學

校の問題には一切觸れなかつた。それ丈けに僕は責任を感じたが、加減が分らなくて困つた。光岡君は幾ら督勵しても落ちつき拂つてゐる。一體、僕は試驗といふと騷ぐ方だ。それだから成績が好い。天分よりも努力で持つてゐる。
『何うだい？　君。やつてゐるのかい？』
『やつてゐる』
『嘘をつけ。ギターばかり彈いてゐる』
『ハツハヽヽ。あれは何うも音がして困る』
『呑氣なことを言つてゐるぜ』
『僕は詰込が利く』
『ソロ〳〵始めよう』
『いや、利く時間が短いから、前の晩にやらないと忘れてしまふんだ』
『前の晩に病氣になつたら何うする？』
『それまでの天運と諦める』
『危いんだね』
『何うにかなるよ、君。毎日休まずに行つて講義を聽いてゐるんぢやないか？』
『理論を言へば然うだけれど』

『君は矢つ張り神經質だね。出來たら書く。出來なかつたら書かない。試驗つてものは簡單明瞭だ。しかし大抵書けるやうな廻り合せになつてゐる』

と光岡君は度胸が好い。毎日教室で聽かされてゐることだから、書けるのが當り前だ。考へて見れば、その筈だが、僕は徹底的に準備をしないと氣が濟まない。學生には種々の型がある。僕は試驗度胸の惡い口だ。

斯ういふ折からの相談相手は純子さんだつた。お母さんでは心配をかけるばかりだ。光岡氏へ持ち出すと却つて問題が紛糾する。僕は何でも思はしくないことがある場合、

『おい。言ふことを聽かないと、純子さんに言ひつけるよ』

と言つて光岡君を脅かす。これが一種の斷りにもなる。僕は無斷で純子さんの部屋へ行くのぢやない。相談の爲めに出頭する。時には出頭の爲めに相談することもあるけれど、純子さんは敢て迷惑がらない。

『兄はあれで頭は相當のものよ』

と純子さんは或程度まで信じてゐる。頭ごなしにする番町の姉さんとは違ふ。因にこの姉さんは元來吝かな性分らしい。僕のお蔭で御主人諸共光岡君へお詫が叶つたにも拘らず、僕を認めない證據に、相變らず純子さんの緣談を持つて來る。

『無論好いんですけれど、變な自信に碍ひされてゐます』

『受けさへすれば間違ございませんわ』

『あなたも同じやうに仰有るんですね』

『今までの經驗で分つてゐますから』

『兎に角、もう然う餘日がないのに、一向本氣になりません』

『本當に受ける氣でございませうか？』

『はあ？』

『試驗を受ける氣でございませうか？』

『そんな疑問があるんですか？』

と僕は覺えず語勢を强めた。

『オホ、、、』

『何ですか？』

『そんなに吃驚なすつて？』

『はあ、受けないなんて言ひ出されたら目も當てられません。それでなくても可なり業を煮やしてゐるんですから』

『去年はその日になつて氣が變りましたの。徹夜で支度をして置きながら、急に旅行に立つてしまつて、見す〳〵一年後れました』

『何か動機があつたんですか？』
『考へて見ると詰まらないと申してゐました。氣紛れですわ、全くの』
『溜りませんな、これは』
『その邊のところをクレ〳〵も御警戒下さるやうに、私、お願ひ申上げようと思つてゐたところでご
ざいます』
『心配が又一つ殖えましたよ。準備をさせる上に受けさせなければなりません』
『私からもお願ひ申上げて置きますわ』
『何うぞ』
『あれで未だ慾が出ないんでございませうね』
『子供ぢやありませんよ』
『オホ、、、』
『ハツハ、、』
『それから妖魔さんよ』
『はあ』
『試驗中にあんな方がお出になると、それこそ大變ですわ。私、玄關拂ひをお引受け致します』
『僕、打ん撲つてやります』

『まあ！　反感を持つていらつしやるのね』
と純子さんは矢張り容姿の上の競爭意識があるから、僕が美千代さんを貶すと御機嫌が好い。賢之助君についても然うであつてくれゝば宜いと思つて、
『もう一人警戒人物がありますね』
と僕は氣を引いて見た。
『誰？』
『ケンさんです』
『あの方、御勉强の邪魔になりませんわ』
『しかし話し込みますから、試驗中は困るでせう』
『御自分にも御經驗がありますから、試驗中はお見えになりませんわ。あれでナカ〳〵念を使ふ方よ』
『才物らしいですね』
『迚も。父の氣に入りでずわ』
『成績が好いんでせう？』
『はあ、法科を上の方でお出になつたんですつて。三井の方へ引つ張られたのを家の會社へ來て藏いたんですから、屹度特別待遇でございませう』

『鬼に金棒ですね』
『何故？』
『社長が伯父さんですもの』
『本當の伯父ぢやありませんわ』
『それにしても遠ひませう』
『御出世は屹度なさいますわ。若手の中に一寸あれぐらゐの人は見かけませんつて、兄も褒めてをりますから』
『さあ。光岡君は餘り感心もしてゐないやうですよ』
『麹町の兄ですわ』
『はゝあ』
『會社で兄の下に使はれてゐますから、時々伺ふんでございませう』
『成程』
『姉にも信用がございますわ』
『それで光岡君が惡く言ふのかも知れません』
『此方の兄さんにかゝつちや誰だつて形なしですわ。あなたぐらゐのものでせう』
と純子さんは僕に花を持たせてくれたが、好いのか惡いのか分らない。僕は光岡君に信用がある。

これは確實らしいが、光岡君は到底變物だ。相原君は世間一般に信用がある。つまり社會的に認められてゐるんだから、いつ何時壓倒的の勢力を占めるかも知れない。
それは然うと、光岡君は流石に僕の苦裏を買つてくれた。誠意は矢張り通じる。
『今夜から些つとやつてやる』
と言つて、取りかゝつてくれた。尤も隨分誘導に努めた。風格が變つてゐた丈けに、類のない勉強方法だつた。ドン〳〵讀んで行つて、ところ〴〵へ○に山といふ下駄印のやうなゴム版を捺す。ボン〳〵〳〵と頗る速い。
『君、それは何だい？』
『山だよ』
『え？』
『山。山の字だ。見給へ』
と光岡君はゴム版を渡した。丁度郵便局の消印の大きさだ。柄も長い。ボン〳〵と僕も捺して見た。
『山をかけるのかい？』
『然うさ。君はこの山印のところ丈け讀んで行き給へ』
『他のところは？』

『出ない』
『何うして分る？』
『カンで行く』
『危い話だ』
『君は度胸が悪いな』
『しかし出なかつたら何うする？』
『そこが山だ。しかし不思議に出るんだよ』
『そんなことで點が取れゝば樂なものだぜ。本氣になつて勉强する必要はない』
『事實然うだもの。カンで行く。山カンつて言葉はこゝから出たんだらう』
『山をかけると同時に他のところも充分讀めば宜い』
『それぢや山にならないよ』
『君はいつでもこの流儀で行くのかい？』
『うむ。十中八九、七八かな。十中五六七ぐらゐは當る』
『見給へ、ダン〳〵相場が下つて來る』
『十中七八だらう。山山山とあるところが出る。これは字から言つても可能性がある。山と山は出る
といふ字だ』

『山でも宜いから、屹度受けるんだぜ』
『安心し給へ』
『何分頼む』
と僕は逆らはないことにした。反感を起して方針を變へられると山も田地もなくなる。
光岡君の山カン流に對して、僕は細心入念に準備をした。後から實地教訓によつて納得させてやら
うと思つたのである。しかし試驗の結果は案外だつた。光岡君は僕が取つた丈けの科目を取つてくれ
た。全然山カン流に從つたから、當らないのは内容が好くなかつたが、當つたのは素晴らしかつた。
三科目丈けは遙かに僕を凌いだ。
『君は矢っ張り頭が好いんだね』
『矢っ張りとは何だ？』
『元來つて意味さ』
『漸く分つたかい？』
『威張り出したね』
『いつも言ふ通り、井戸へ落ちた時ひどく打つてゐる』
『あれは多少根據があるかも知れないね』
『あるとも。それを認めてくれなければ、僕の知己とは言へない』

『天才の出來損ひかい？』
『うむ。少し鰹が入つてゐるけれど、巷間傳ふるが如き馬鹿息子ぢやない積りだ』
と光岡君は冗談のやうに主張した。
『この調子で行くんだね』
『うむ。山をかける』
『方法はお互の自由にしよう。矢つ張り得手勝手があるものらしい』
『君が滿足してくれて結構だ』
『安心したよ、漸く』
『山必ずしも山ぢやない。君は何うも優等生の素質があるから將來が案じられる』
『何故？』
『讀む分量と勉强を一緒にしてゐる。山つてものはもう半分勉强だ。こゝが出ると思ふのは、こゝの學課としてはこゝが一番大切だと思ふことだらう？』
『うむ』
『然う思ふのは判斷力だ。山カン卽ち判斷力さ。それだから山カンの利かない奴は少しぐらゐ好い點を取つても、社會へ出てから影が薄い』
『僕のことかい？』

『一般論だよ』
『それなら或程度まで眞理だらう』
『山カンの軍門に降れ』
『降らないけれど、結局するに、君の方が僕よりも悧巧だ。僕は隨分勉强したぜ』
『徹夜したね』
『うむ。それでゐて、その割合に利いてゐない』
と僕は指導役を勤めてゐて又指導を受けるやうな氣がした。成績が悪いといつても、光岡君のは普通の意味でない。何となく自ら主張してゐるところに近い。僕は殊に一緒に暮すやうになつてから大賢の出來損ひといふ印象を受け始めた。

說法狸

大阪の兄貴から時々手紙が來る。いつも勤務の心得が細々と書いてある。會社に勤めて人に採されてゐる丈けに、よく氣がつく。しかし忠勤の彼方に大きな期待を持つてゐる。何處までも打算的だ。目端が利き過ぎる。こゝに兄貴の長所と缺點があつて存すると僕は思ふ。
光岡君の爲めに盡して、光岡氏の信任を固めて置けば、お前は卒業後就職難がないのみならず、出世が早い。サラリーマンになつて見ると分るが、幹部の息のかゝつてゐる奴とかゝつてゐない奴は

振りが違ふ。昔、幾何學の先祖ユークリッドが數學の學校を開いた時、國王トレミーも講義を聽いて、もつと樂に覺えられる法はなからうかと注文をつけたら、ユークリッドは

『陛下よ、學問には近道がございませぬ』

と答へたさうだ。

（因に、兄貴は秀才だから、學校で習つたことを一切忘れないのが自慢である）

しかし立身出世にはこの近道があるんだ。御覽。御曹司連中は皆出世する。自分の家の會社だから、お手盛りが利く。次が實力だ。本當に實力のある奴はグングン伸す。尤もそれも周圍から認められての話だ。そこで大切なのは親分を取つ捉へることだ。親分さへあれば、頭の中は多少空疎でも出世が早い。

お前も知つてゐる通り、おれは學校時代に成績が好かつた。會社に入つてからも、人後に落ちるところは些つともないけれど、親分のない悲しさ、未だ實力の全幅が認められない。早く何うかしないと出世が後れる。これから親分を捉へるんだ。そこへ行くと、お前はひどく天運に惠まれてゐる。未だ卒業もしないのに、親分の方から寄りついて來る。おれほどの秀才なら兎に角、これは何かの誤解だと思つてゐる。呵々。前途有望だよ。それも大親分だぜ。光岡氏といへば、關西までも鳴り響いてゐる。

おれはこの間光岡氏から自筆の返事を貰つた。あれ以來お前がお世話になつてゐると思ふから、時

折文章を推敲して御機嫌伺ひを寄せる。返信は素より期待してゐなかつたが、それが來たんだ。あれくらゐな人になると、書も巧い。萬事佛はつてゐる。同僚に見せたら、皆驚いたよ。一人はもう少しで卒倒するところだつた。

『君は何うしてこんな人を知つてゐるんだい？』

と一同おれに敬意を表した。光岡氏といへば、先づこんなくらゐのものだ。天物を暴殄すべからず。何處までも親分として利用して、有終の美を遂げなければいけない。云々。

兄貴は學校時代の癖に禍ひされてゐるのらしい。優等で通して、級長だの委員だのといふ役が始終ついてゐたものだから、會社に入つて僚輩と全く同じでは心許ないのだらう。頻りに足掻いてゐるやうだ。手紙を書く度に親分問題に觸れる。

會社といふところは入つてさへしまへば、學問は要らないんだ。學校の成績なんてものは入場券に過ぎない。働くものが調法がられる。それが當り前だ。有効に働くといふことの外に能はない。馬鹿でない限りは勤まる。人物試驗は單にその邊を考査するのらしい。斯ういふ仕掛だから、おれのやうな秀才も全く十把一からげの中に入つてしまつて、認められる餘地がない。

會社は大勢がシャツ一枚になつて體操をしてゐるやうなものだ。皆同じことをやつてゐる。號令に

從ふのだから、少しも遠はない。但しその中に紫の帽子を被つた奴が何人かゐる。これが自然目につく。同じことをやつてゐるのだけれど、紫の帽子を被つてゐるものだから、如何にも上手らしく見える。

『よくやるね、あの連中は。月給を上げてやれ』

といふことになる。その他に特別體格が好くて更に有効にやつてゐるのが數名ゐる。その第一人者はおれだ。しかしおれ達はシャツ一枚だから容易に目に留まらない。隨分大きな聲を出してゐるのだけれど、未だ〳〵注意を惹かない。これでは何うしたつて、もつと簡便な近道を志望する。おれもその中に紫の帽子を手に入れる。親分を取つ捉へる。おれはこんなに苦心してゐるんだ。お前は親分がもうあるんだから、逃がさないやうにしろ。云々。

僕は兄貴を驚かしてやる氣になつて、或晩、一寸調子づいた。

『度々の親分論、御教訓のほど有難し。しかし實を申上げますと、僕はそんな姑息なことは考へてゐません。もつと一掃的な政策があるんです。お目に留まつた筈ですが、光岡家には純子さんといふ令嬢があります。僕は順當に行けば、この人が貰へる積りです。すれば光岡氏は親です。分といふ字が落ちる丈け、御註文に副はないかも知れませんが、親分よりも親の方が關係濃厚でせう？　女婿です。勿論男子の本懷ではありません。しかし懇望されゝば仕方がないと思ひます。天下の大勢が僕に

傾いてゐるんです。この件について兄上の腹藏ない御意見を承はりたいと存じます』

と認めた。そんな料簡を多少持つてゐる所爲か、スラ〳〵と極く自然に筆が走つた。しかし直ぐに思ひ直した。兄貴が本氣にして騒ぎ出すと大變だ。弟自慢だから、直接光岡氏に推薦しないとも限らない。

『いけない〳〵。人格者がこんなことを書いちや落第だ』

と僕は手紙を破つて屑籠に投じた。悉皆方面を更へて謹嚴な返事を書き始めたが、矢張り多少香はせて置くのも徒爾ならずと考へた。年齢以外には兄貴に負けないといふ氣があるから、兎角誤つて見たくなる。そこで又筆を執り直した。しかし今度は純子さん〳〵〳〵といつの間にか留め度もなしに書き續けてゐた。純子さんのお清書だ。同じ字ばかり見てゐると、こんな字があつたかと思ふことがある。正にそれだつた。

『いけない〳〵』

と間もなく又寸斷して屑籠に入れた。それでも不安心を感じたから、萬全を期した。即ち屑籠の中から紙片を拾ひ集めて、灰皿の上で燒いてしまつた。

『おい。何をしてゐる？』

とそこへ光岡君が入つて來た。

『やあ』

『煙いぢやないか？　狸が自分で燻してゐるのかい？』
『狸はよしてくれよ。純子さんまでその油繪を拜んで僕を誹ふんだ』
と僕は輕い抗議を申入れた。光岡君の描いた庭の狸銀杏が壁に吊つてある。昔、その下に棲んでゐた狸が夜な〳〵坊さんに化けてお說法をして歩いたといふ。
『人格狸、何か燒いたね？』
『手紙だよ』
『柄にないね。燒く必要のあるやうな手紙が來るのかい？』
『いや、兄貴へ書いたんだよ。兄弟喧嘩なら秘密だらう』
『成程。よく手紙を寄越すと思つたら、喧嘩の文通かい？』
『いや、喧嘩つて程でもない。世話を燒いて來て煩さいんだ』
『僕もこの間手紙を貰つた。その中に返事を書く積りだけれど、君から宜しく言つてくれ給へ』
『有難う。しかし君にまで世話を燒いて來たんぢやないかい？』
『牛ばお說法だつたよ』
『然ういふ奴だもの。獨り好がりで、あれが病氣だから困る』
『君の兄貴だと思つたよ、流石に』
『何ういふ意味だい？』

『兄弟ともこゝへ祀る仙打がある。一つ拜んで置かうかな。ハッハ、、』
と光岡君は銀杏の油繪を仰いで拍手を打つた。
『君、一寸』
『何だい？』
『そこへ掛けてくれ給へ』
と僕は威儀を正した。實はその日、例の美千代さんが遊びに來たのだつた。僕は純子さんの指圖に從つて光岡君に豫め注意して置いたのだが、光岡君は美千代さんに對する態度を少しも改めない。夕方まで引き止めて、食後自ら家まで送り屆けた。純子さんは憤慨した。御意向を伺つて見たら、これを機會に嚴しく言つて貰ひたいといふことだつた。純子さんの意見には必ずお母さんの裏書がある。僕も注意を完全に蹴飛ばされてしまつては立つ瀬がない。こゝは善導係、一番强氣に出て置く必要があると思つてゐた。そこへ光岡君が美千代さんの家から歸つて來て僕の部屋へ顏を出したのである。唯さへ氣に入らないところへ說法狸に托けて揶揄されたのだから、僕もキッとなつた。
『又來る』
『いや、いけない』
『お說法だな、こん畜生』
と光岡君は矛盾の語を吐いた。僕の態度を見て、少し慌てたのだらう。

『僕は役目の上から多少は仕方がないよ』
『分つてゐる』
『しかしお説法ぢやないから、こん畜生は見當違ひだらう？』
『一寸口が辷つたんだよ』
『僕はお説法なんかしない。お説法つてものは一般の心得を説くものだ』
『忠告かい？　それなら』
『いや、忠告もしない。忠告つてものは相手の心得違ひを前提としてゐる。但し君は何か覺えがあるのかい？』
『これはイヨ〳〵始まるんだね。仕方がない』
『何うだ？』
『ないよ』
『それは僕も認めてゐる。君ぐらゐなら資性純良の方だから、積極的に惡いことはしない。心得違ひ料簡違ひつてことは先づもつてないだらう』
『有難う』
『しかし君には氣紛れがある。人とは違ふと自分でも主張してゐるんだから、これは認めるだらう？』
『認める』

『その氣紛れから來る過失がある。手短かにいへば道り損ひだ』
『それは時々あるさ。神さまぢやない。人間だもの。君だつてあるだらう？』
『無論あるけれど、僕は過失を過失と認めて後悔する。しかし君は自分を特別誂へと思つてゐるから、反省つてことが些つともない』
と僕は突つ込んでやつた。この邊光岡君の病根と診斷してゐる。
『何だい？』
と光岡君は氣色ばんだ。
『僕は頼まれてゐる役目の上から、注意するんで忠告でもお説法でもない』
『氣のついたところは無論言つて貰ふさ』
『今日のも過失だらう？』
『何が？』
『美千代さんを家へ送つて行つたことさ』
『過失ぢやない。あれは若い女性に對する禮儀作法だ』
『君は本當に然う思つてゐるのかい？』
『うむ』
『それぢやそれまでの話だ。僕と意見が違ふんだから』

『稀には違ふこともあるだらう』
『君が僕の注意を守つてくれなければ仕方がない』
と僕は靜かに言つた。純子さんから授かつた切札を使つて見るのだ。
『何うするんだい？』
『僕は御免蒙つて、本郷の下宿へ歸る』
『おい。おい／／／／』
と光岡君は手を振つて制した。成程、利く。
『一體、僕は善導係だの制動手だのと役は好きぢやないんだ』
『分つてゐるよ、それは。僕が無理に賴んだんだから』
『それだから氣に入らないことがあれば、いつでも引き揚げる。お互に善意と誠意の關係だ』
『僕が惡かつたかな？』
『惡いとも』
『しかし冗談に言つたんだよ』
『何を？』
『狸の一件さ』
『君は矢つ張り誠意がない。僕は狸よりも美千代さんを問題にしてゐるんだ。君は分つてゐながら白

を切る』
『送つて行つたのがそんなに氣に入らないのかい？』
『そればかりぢやない。僕は美千代さんつて人の僕に對する態度が氣に入らない。あれは君の心持の反映だと思つてゐる』
『何を誤解してゐるんだらう？』
『誤解ぢやないよ』
と僕は實際個人的に侮辱を感じてゐた。善導上の都合ばかりでない。
『君の考へてゐるところを腹藏なく言つてくれ給へ。君に過失があつたら、陳謝するから、歸るの何のつて話はよしてくれ給へ』
『美千代さんは僕のことを善良コーチと呼ぶ。これは君、尊敬だらうか？　輕蔑だらうか？　僕はその人から尊敬を要求しない代りに、輕蔑を期待する理由を持つてゐない積りだ』
『冗談だよ、あれは』
『君が嘉納する冗談かい？』
『僕は君を侮辱する奴があれば、默つてゐない。いつかもケンさんを叱りつけたぢやないか？』
『君はケンさんには嚴だけれど、美千代さんには寛だ』
『それは女だもの。强く言へば泣き出して始末に困る。しかし僕だつて、目に餘れば斷然たる處置を

取る。いつかの骨相學の時でも分つてゐるだらう？』
『あのまゝにして置けば宜かつたのに、御機嫌を取り直したから、いけないんだ。增長し切つてゐる』
『あゝいふのが多いんだよ、この頃は』
『しかし純子さんみたいな人もある。僕はあゝいふ引き眉毛なんかしてゐる女を見ると叩き踏してやりたくなる』
『大いに憤慨しちやつたんだね』
『今日、君が踊らうと言つた時、美千代さんは厭だと言つたらう？　人格者が睨んでゐるからつて』
『うむ』
『一體、人格者なんて失敬だ。別の含蓄があるんだ』
『今度注意して置くよ』
『君は僕の存在が迷惑らしかつた。それから美千代さんが「この部屋の雰圍氣は何だか壓迫的ね。學校でお修身の講義を聽いてゐるやうな氣がしない？」と言つたらう？』
『よく覺えてゐるんだね』
『君は何と答へた？』
『さあ』
『成程、道德の香がしますねとは何だい？　君は褒めるどころか、一緒になつて僕を馬鹿にしてゐ

る』
『冗談だよ、君。深い料簡はない。しかし然ういふ意味に取れたなら、僕が惡いんだから、幾重にも謝罪する』
『以來慎んでくれ給へ』
『散々だな、今夜は』
『僕はあの美千代さんつて人は初めから虫が好かない』
『過失は過失として、これから氣をつければ宜いんだらう？』
『無論さ』
『しかし好き嫌ひは問題が別だよ。君が嫌ひだつて、僕が好きなら仕方がない』
と光岡君は果して盛り返しの氣勢を示した。何うせ簡單に降參する男でない。
『それは蓼食ふ虫も好き〳〵だ』
『君、侮辱だらう？　それは』
『侮辱ぢやないよ』
『君は何でも獨斷的だ』
『しかし事實だもの』
『事實と斷定するのが間違つてゐる』